
偽本格冒険推理 ～孤島来るやつ大体殺人～

ありんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽本格冒険推理 孤島来るやつ大体殺人

【Nコード】

N2177EB

【作者名】

ありんこ

【あらすじ】

わが身が可愛ければ、その島に身を寄せてはならない。なくしたくない心があるならば、その神に祈ってはならない。背を向けて立ち去れ。ここは忌まわしの地である。終焉と滅びの海である。

孤島に集まったちよつと特殊な四人の小学生たちの話です。裁判のすえにやってきたテレパシー少女を筆頭に教祖、売人、おっさんがメインで出てきます。思想、信仰、正義、国籍が入り乱れます。

子供たちはそれぞれの立場から事件にかかわっていきます。被害者か、加害者か、あるいはその両方か？お前は誰だ？ルールなら海の彼方へ置いてきた！

注意事項

話の都合上人が死にます。殺したり殺されたりします。

子供だらけです。

宗教の話もします。

児童文学をコンセプトとして書いておりますので、大人の読者にはクサイ文章もあるかと思いますが、ご容赦くださいませ。

みー１ もう家はない（前書き）

先に謝っておきます。

申し訳ありませんでした。

みー 1 もう家はない

わが身が可愛ければ、その島に身を寄せてはならない。なくしたくない心があるならば、その神に祈ってはならない。背を向けて立ち去れ。ここは忌まわしの地である。終焉と滅びの海である。

小学生のみーはある日、学校に行けなくなった。行きたくないわけではない。行きたい気持ちは十分にあるのだが、行けない。

イマドキの子はいじめで不登校になったり自殺したりするらしいから自分もそう思われるのかもしれない。だがそれは何だか嫌だ。私のはもつと大人な理由だとみーは思うのだ。

六月にみーは学校を休んだ。まとめて一週間くらいだったか、もちろん病気ではない。ぴんぴんしていた。理由は家庭の事情ってやつだ。学校で授業を受けるべきところ、裁判所で裁判を受けていたお父さんやお母さんが何かしたわけではない。被告は彼女自身だった。

「井上恵。あなたは起訴事実を認めますか？」

今でも耳の奥にあの冷たい女の声が響いてくる。不思議と怖くは感じない。その当てもドラマみたいだと思うばかりで怖さはあまりなかった。思うに、突飛すぎて現実感がなかったのだろう。

「キシジジツって、何ですか？」

井上恵は非行少女ではない。

勉強は嫌い、優等生でもないが、自分で言うのも変だけど生まれ落ちて十年足らずのこの人生。いじわるもしなかった、悪口はたまに言ったけど、真面目に生きてきたつもりである。そんな彼女が訴えられてしまった原因は突き詰めるとみーの体質に帰結する。

「原告、畑田菜々美の内心の自由を侵害したことを認めますか？」

みーには人の心が読めるのだ。

相手が何も言わなくてもイメージのようなものが伝わってくる。

つまりはテレパスだ。そればかりか、相手の心にイメージのようなものを伝えることまでできる。ただ、取り調べのおじさんが嫌いだっただからこつちは誰にも教えていない。

「私のせいじゃないもん。畑田さんから勝手に聞こえてくるんです」畑田さんはクラスの女の子のいわゆるボス格だ。体がごつつくて、正直言つて何だか嫌な子だ。みーだつて散々からかわれた。無視されて泣かされた子もいる。関わり合いになりたくないタイプだった。今、この瞬間ものすごく関わりあつてるけど、……やめたい。

それもこれも小池さんが喋つたからだ。あの子は誰にも言わないつて言うから言つたのに。

テレパスだから何かに活用できて得だろうとか、聞きたくない言葉まで聞こえてつらいだろうとか、畑田さんに訴えられてからそれはもういろんな人に言われたけど全然そんなことはない。

みーは生まれた時からテレパスだった。いや、生まれた直後なんか覚えていない。ただ物心つく頃にはもうそうだった。むしろこつちが『普通』だ。

親戚のおじさんは「お悔やみ申し上げます」なんて言いながら心の奥底では「ざまあみる糞爺」と罵る。隣のおばさんが「かわいい猫ちゃんね」とか言つて「やだ汚い。野良かしら……変なビョーキ持つてると怖いし、うちのターちゃんには近づけないようにしましよ」を隠しているのだつて当たり前だった。

みんな大体そうだった。思ったままのことを言っているのはおバカの子か這い這いの子だ。それは賢いことじゃないのだ。

もちろん、みーだつてお父さんやお母さんはどうして本当のことを言わないんだろうかと思つた。ほかの人だつてそうだ。正直にいなさいとか言いながらお互いに本心とは違う言葉を相手に投げかけている。

しかし、みーはわざわざ相手に直撃することはなかった。その不思議な現実を受け入れ、そういうもんだと思つて生きてきた。ホン

ネとタテマエってやつだ。

小学校に上がって、教科書やまんがを読んで初めて自分が異質なのかもしれないと気付いた。でもやっぱり確信がなかった。誰かに聞くのはよくない。だってみんなと同じにしてもみーだけが心を読めるのだとしても変な子になってしまう。人に聞く代わりに本を読んだ。

そして、やっと腑に落ちた。やっぱり自分以外誰も他人の心を読んでいない。でもやっぱり、そんなこと言えない。変な子になってしまう。だから秘密だったのだが、すごい！と言われていい気になってうつかり小池さんに話してしまった。そしてこの騒ぎだ。

もう転校するしかなさそうだと子供心に思った。

次転校したらもう誰にも言うまい。しかし、みんなの心の声を聴く限りどうも転校では済まされそうにないようだ。

マスコミがテレパス・井上恵を報道しちゃったらしい。何だか難しいことを言っているが、つまり日本全国どこへ行ってもみーのこととはみんな知ってるってことだ。そりゃあよろしくない。何がどうよろしくないか自分でもわからないがみんなそう言うんだからよろしくないだろう。

これがみーが学校へ行けなくなった理由である。

結局裁判には勝ったみたいだが、いいことは何にもない。これを機にお父さんの浮気はバレたし、お母さんは流産したし、生まれる前の弟の断末魔もばっちり聞いたし、井上家は解散した。

かなりシヨッキングだがお父さんの浮気はとっくに知っていたから『普通の』子と比べると衝撃は軽かったと思う。断末魔だって聞くのはこれが初めてではない。電車に乗るとよく聞く。残留思念って言うんだって。

みーは遠い親戚に引き取られることになった。60くらいのおばあちゃんだ。日本国内だが大丈夫とのこと。二重ヶ島という絶海の孤島だ。

やっぱり電話越しの心の声を聞いても何がどうなって大丈夫なん

だかよくわからなかったが、といって他に行くところがない。裁判所の人に送ってもらって船に乗って向かうことになった。

みーは悪い意味で有名になってしまった井上恵をやめて、立原恵美になった。これでいくらかわかりにくくはなっただろう。

立原のばあちゃんが住んでいる島が近づいてくるイメージを周りの人の頭から拾いながら、到着を待つ。それにしても、一番後ろの席になってしまったのが憂鬱だ。通路に挟まれた真ん中の列で窓も遠いから景色も見えない。

(うん、さっさと寝ちゃおう)

朝起きたらとなりのおじさんが死んでいた。

みー 1 もう家はない（後書き）

字数少なめでやっていきたいと思っております。いえーい。

ひー 1 ポリテイカルコレクトなんかない(前書き)

ポリテイカルコレクト。政治的に正しいこと。また、その選択。
ってところでしたっけね。

ひー１ ポリテイカルコレクトなんかない

神薙ひじりは馬鹿が嫌いだ。

まず知能が欠けているという点でわけがわからない。人間なんか知能があつてなんぼだろうに。

それでいて叫んだり暴れたりエネルギーシユなものも嫌いな理由のひとつだ。奴らの持つ『馬鹿リヨク』とでもいうようなものに引張られて、相手をする自分まで馬鹿になる気がする。

そついうひじり自身が馬鹿かどうかというと、やはり馬鹿なのだろう。本当に賢い人ならきつと救いのない馬鹿どもでもうまいことどっかに活用して馬鹿と思わずに済むはずだ。

「あのさあ！ やっぱりさあ！ 今度怪しいの添乗員のおねーさんだろ！ 間違いない！」

それでも目の前のこの馬鹿と比べればいくらか賢いほうだと思つう。しかし、同じく目の前には次元の違う賢人がいる。そうすると一気に自分が馬鹿に見えてくるのだ。

ここでもう一度馬鹿が目に入る。やっぱりマシなほうだと思つう。そしてもう一度賢いほうを視界に入れて、結局きりがない。

いつも最後に自分の人間関係が偏りすぎなんだという結論にひじりはたどり着く。最小の目盛りがメートルの物差しでは三ミリや三ミリは見られない。

「そつか。聞いてやるから落ち着きなさい。根拠をわかりやすく、ひとつひとつ説明するのだよ。何といつても、一同集めてサテと言つたところで推理を披露できない探偵ほどみじめなものはないだろ
う」

だから馬鹿という存在が嫌いなのだが、目の前のこいつに限つては別らしい。なんだかんだ親しくしているし、同じ組織内にいる。

「うん！」

やすやすと乗せられて、馬鹿は話し始めた。

曰く、動いてる船の中を歩き回るのは不自然だ。歩き回っておかしくないのは添乗員のねーちゃんしかいないッ！

頭が痛くなつてくるような推理だった。胃も痛かった。主にこいつのせいでひじりは若干小学三年生にして胃痛が悩みだ。

「なるほど、なくはない話だ。しかし、実際には乗客も船内を歩く。それに彼女は被害者となんの関係もなかったようだよ。これはどう説明するのかな」

「むっ……でもさあ！同じ国の中にいるんだぞ！ちよつとくらい関わりがあつたかもしれないじゃんかあ」

もう限界だ。水筒を開けて胃薬を飲んだ。

日本本土からの船が着く北港は今少し騒がしい。乗っていた人間が一人死んだのだ。それ自体は別に珍しいことじゃないが、島には娯楽が少ない。野次馬が集まっている。自警団が止めても聞かない。そろそろ威嚇射撃が来るかもしれない。そしたら最悪銃撃戦だ。また死体が増える……。

こんな連中と一緒にしてほしくはないが、いつそ野次馬だったらもうちよつと楽だろうなとひじりは思うのだった。

野次馬ならあの修羅場へわざわざ向かわなくて済む。手前で踵を返して帰ってくればいいだけだ。

「君は一つ誤解している。そもそも日本という国は、我々の住むこの島の何十倍も広いのだよ。」

「警察があるから、警察屋を雇う必要も自警団を作る必要もない。外交を行うのも政府が組織されていて、それ以外の人間というのがいっぱいいる。つまり人同士の関わりが少ないんだ。」

「だから多くの場合、関係がないと言ったらそれは本当じゃないのだよ……わかるかな？」

わかるかなも何も、普通はそうなんだけどな。ひじりはため息をついた。

変わっているのは、おかしいのはこの島のほうだ。ただそれがわ

かつてなさそうなのはうちの馬鹿もとい網谷十四男の頭が悪いせいではない。真実頭は悪いが。

トシはこの島で生まれ育った。しかも島外に出ることもなかったという。単に知らないのだ。メキシコなど南米の国と島を行き来している兄たちから話はいろいろ聞いているはずだが、想像しにくいものがあるのだろう。

「『9』、もう行こう。このままじゃトシが納得する前に銃撃戦になる」

9はトシと話すのをやめてこちらを、今初めて口を開いたひじりのほうを振り向いた。それから小首をかしげて港の入り口を覆い隠す人の群れを見た。

「そのようだね。では、トシ。余計な死人が出る前に、我々も現場に入るとしよう。話はそれからでも遅くないだろう？」

「うん」トシは素直にうなずいて、9とひじりの手を握った。その素直さと人懐っこさはなんちゃって賢人のひじりにもまさしく賢人の9にも見習うべき点である。「行くぜっ、カルト探偵団！」

ただ、このセンスの欠片もなければ政治的にも正しくないえげつない頭おかしい組織の名称だけはいい加減勘弁してほしいと思うのだった。

「おー……」

みー2 魚市場にて(前書き)

まったりー。

みー2 魚市場にて

みーはいい子だから目覚ましがなくても毎朝大体決まった時間に起きる。

七時くらいである。いつも通り早起したら隣のスイツのおじさんは首にナイフを生やして死んでいた。テレパ子でも寝ている間のことはずがにわかりようがない。びっくりしてキヤーツと叫んでしまった。

どう見ても他殺だ。死んだおじさんというのはみーを立原のおばあちゃん家に送るためついでにきた裁判所の人である。正しくは弁護士の部下だったかもしれないが、どっちも裁判所にいるんだから同じだろう。

とにかく、これでまた被告人に逆戻って、証言台にさかのぼることになるなあ。また行かないやいけなかなあ法廷。続くのかなあ公判。

しかしおそらくおじさんはみーのせいで死んだと思われるわけでもかかわらずその事実に対してそれほど良心が痛まない。いい子だったらそこは痛んでおくべきところだろう。どうも憂鬱な気分だ。それから一時間、もう島のほうが近かったためみーは島についていた。

船は港に繋がれて、乗っていた人はみんな近くの魚市場に集められている。灰色のコンクリートの大きな建物だ。

魚はもう売ってしまったのだろうか、血の跡や発泡スチロールの欠片が濡れた床に転がっているばかりだ。七月じゃ、氷はもうとつとつに融けてしまっている。

朝ごはんは抜きになっているが、みー含めて食欲のある人はいないからだれも何も言わない。

(それにしても暑いなあ。シャワー浴びたい)

良心が痛まないのはみーだけではないようだが、だからって安心できるものでもないだろう。みんなは殺されたおじさんと関係がなかったし、たまたまみー以外悪い人ばかりってこともある。

（やった！死んだ！死んだぞ！あいつが死んだ！ざまあみる！）

ほら、この人みたいに。

心が読めなかった時を考えても（みーは自分が普通じゃないことを知ってからは『普通』の感覚を理解すべくいろいろと考えている）、乗員乗客しめて37名のうちひとりか殺人犯なのは間違いない。

ほかにもちよつとやそつとくらい悪い人がいるはずだ。どの人も頑張つて覗けば、心の奥に隠しているイメージのようなものが現れる。

ただ……若干小学生のみーにはわからないイメージもいくらかあった。いいことか悪いことかのジャッジはやめておこう。思い込むことはステレオタイプといってよくないことなのだ。

警察の人はみーたち容疑者候補を魚市場に閉じ込めて、さらにプレハブみたいなどころへ連れ込んで、一人ずつ話を聞いていた。呼ぶ順番はどうやら名簿の上からである。

それ以外の人が市場を離れようとすると無言で銃を向けられる。大人でも子供でも関係ない、容赦は無しだ。

この銃がドラマで警察の人が持っているような拳銃ではない。アフリカや中東のニュースで見るとような大きな銃だ。

そもそも、警察官らしい恰好をしていない。枯草色の上下に、ポケットのたくさんついた、でこぼこしたベスト。迷彩柄のヘルメット。警察の人というより軍隊の人って感じた。

彼らはこの状況にうんざりしている風だった。もちろん、人が死んだらうんざりするだろう。でも彼らのうんざりは種類が違う。何だか、殺人事件なんてなれっこみたい。もうこんなには飽き飽きしてみたみたい。

（ああめんどくせえ。どいつもこいつも何考えてんだよ……迷惑なんだよ。本土で殺せや）

転職しようかな、なんて気持ちが出てみえる。この島に殺人事件は多いらしい。物騒なところだ。また別の人の心に視線というか、なんというか、感覚を移す。

（犯人探さなきゃいけないかなあ。嫌だなあ。この後バイトがあるのに）

バイトをしている警察、あまりなじみのない生き物だ。公務員は副業をしてもいけないはずである。それにしても「犯人探さなきゃいけないかなあ」とは。それが警察の仕事なんじゃないのか。

（ていうかさ、全員ぶっ殺しちゃおうぜ。どうせろくな奴いないだろ）

それは困る。まだ死にたくはない。この人には近寄らないようにしよう。そう思って体の向きを変えようとした瞬間、背後から謎のイメージが追いかけてきた。

多数の人間による名状しがたいざわざわとしたノイズを簡単に取捨選択して、ひとつの言葉に集約する。

幸いにして小学生でもわかる単語だ。しかし、何だそれはこの感想を避けられない。思い切ってその方向へ足を運ぶ。

（少年探偵団）

裏付けるように遠目に子供たちの影が見えた。

同時に近くにいる警察らしい人の視界を共有して確認する。彼の認識によれば男の子ふたり女の子ひとりだ。しかし彼はスカートかズボンかで見分けているようである。

一人は半ズボンだが、たぶんショートヘアの女の子じゃないか？ 髪の毛の長いほうの少女がこちらを見た。

いや、もともと三人とも警察の人のほうを見ている。でもその子一人だけは違った。みーを見ている。借りた視界を通り抜けてまっすぐに目が合う。

驚いて共有を解いた。何だ。何だ今のは。あっちからは見えないはずなのに、何で目が合うの。

強烈な印象だったように思うが、しかしその顔や表情といった要

素が指の間をすり抜ける砂のように零れ落ちて消えていく。

ひよっとしてあの子もみーと同じテレパスなのか？でも今まで同じ力を持つ子に出会ったことはない。だから何だ。だったらまんがの主人公みたいに嬉しいのか？

みーにはわからなかった。ただ胸騒ぎがずっとこだましている。

わからないことならほかにもある。少年探偵団だって？まんがやドラマや小説でしか見たことないぞそんなの。

大体この島はおかしい。さっき港に着いたところでこんなことを言うのは変だけどやっぱりおかしい。離島だからって警察の人の恰好が違うとか、大きな銃を持っているとか、そんなことがあるもんか。おかしいに決まっている。

とんでもないところに来てしまったのかもしれない。帰りたくなかった。

ひー２ 事情聴取にて

たまたま出てきた自警団のおじさんが事件の概要を話してくれた。自警団はみんなカーキの上下にバラクラバと似たような恰好をしているからよくわからないが、いつもこのおじさんのような気がする。ふいに9がほほ笑んだ。

「9？」

スーツ姿の中年男性が寝ている間に喉を果物ナイフで刺されて死んでいた事件のどこにも笑う要素はなかったと思う。気になってその顔をのぞき込んだ。

「いいや、何でもない」9はそう言って笑みを深くした。それから、わざとらしくくらいあどけなく、『少女らしい』声色を出す。「ねーおじさん、死んじゃった人のお隣にいた子は？」

ちらりとトシを見る。頭は単純なくせに複雑な顔をしている。その気持ちはひじりにもわかる。いつもの9とはまるで違うこの態度、何度も見たがやはりいつまでたっても慣れない。

何なんだ、もう。「あれあれ〜？」だの「こわーい」だの「やったー！」だの、砂糖菓子にジャムでも塗りたくったような声で甘えて見せる。あんなのいくら小学生でも言わない。

言わないのだが、大人はそうは思わないらしい。みんなこの微妙な演技に騙されている。

「トシ、トシ？ 捜査は始めないのか？」

今回もいい感じに教えてもらえたのだろう、9はそう言ってこちらを見た。

確かに深く暗く沈んだ声音にも枯れたような口調にもまったたく9歳の少女らしさはない。大人からするとこちらのほうがおかしいんだろう。ただ、9は子供でも女の子でもない。やはり変な気分だ。

「え？ あ、うん！」

トシは行き先を決めない。9を信頼しているというよりは、自分でどこへ行くべきかわからないのだ。そのくせ走りたがる。

馬と鹿を足して馬鹿だが、その強靱な脚だけはある状態なのだ。誰かが頭脳になって行き先を決めてやらねばならない。探偵団に頭脳とはいいい皮肉だが、頭脳の役はずっと9だ。

「まずは被害者の隣の席にいたという少女に話を聞くぞ。何か見ているとすれば彼女だ。二人ともついてきなさい」

しぐさだけは幼い少女のように、軽やかに歩き出す。体を動かすのが別の回路になっているのだろう。

「わかった！ 捜査のドージョーってやつだな！」

「ははっ、それを言うなら常道だな」

ひじりは歩き出した二人のあとを、少し遅れて追う。何でもないと云った時のあの笑みが気になる。優しい笑み。あの時感じたざらついた不快感。

まだそれは腹の底にわだかまっている。許さない許さないとよくわからない呪詛を吐きながら、黒い獣のようにうずくまっている。

この後会う少女には……周りの人とは仲良くしなさいというのが神様の教えだが、果たしてこんな気持ちで優しくできるだろうか。仲良くできなかつたら、ただでさえ穢れた自分はさらに罪を犯すことになるだろうか。

僕を見捨てないで、神様。

その少女は、これといって特徴もない普通の女の子だった。なのに、妙に9は気に留めているようだ。気に入らない。

9がみーに覆い被さるようにして何事か囁いたとき、ひじりはやつとこの重苦しい感情の正体に気づいた。嫉妬だ。トシに引っ張られていくその背中を睨みつける。

「ふふ、どうしたんだい。怖い顔だ」振り向かなかった。低い声と体温だけが伝わってくる。「どうやら彼女には、私が少女漫画の女の子のように見えたそうだよ……かわいい子だね」

「ふうん。気になるんだ？」

冷淡な声を作って関心のない風を装った。背後にいる相手の姿はひじりの中でゆっくりと組み替えられ、均整の取れた体つきの大人の男性がもやもやと描き出される。

「気になるか、ならないか、といえば気になるな」

あの子は少し特別なところがあるようだ やめてくれと叫びそうだった。今すぐに振り向いて厚い胸に顔をうずめたかった。一握りの意地がそれを止める。

ひたと冷たい手がひじりの手を握った。弾かれたように振り向く。少女の矮躯がそこにある。

「行こうか、ひじり」

ひー２ 事情聴取にて（後書き）

題名のわりに聴取してませんね。いやまあ、担当じゃないってこと
とでーす。

みー3 面通し(前書き)

夏休みも近づいてきましたね。一緒にテストとレポートの締め切りも近づいてきますが、皆さん時間というベルトコンベヤーの上でいかがお過ごしでしょうか。

ありんこは必死に逆走しております。戻らないです、ええ。

みー3 面通し

例の探偵団とかいう一団と引き合わされた。

初めまして、立原恵美です。みーって呼ばれてます。変名後だが、イメージトレーニングの成果か、間違えずに言えた。自己紹介大会だ。

まず、よく日焼けしたアホの男の子が網谷としお。アホは見ればわかる。心の声がほとんど言語化されていない。賢い人ほど心の中にたくさんの言葉や文章が浮かんでいる。でもただのアホではなさそう。英語の字が見える。外国語を喋れるんだらう。

としおは十四番目の男の子って書くらしい。大家族なのかな。ざらついた織の白っぽいシャツを着て、だぶだぶの半ズボンを腰のところの紐を絞って履いている。

で、もう一人も男の子だった。色が白くて女の子みたいな顔をしているが、物静かな彼が神薙ひじり。静かすぎるが……。灰色の襟のついた前開きのシャツで、ちょっと色あせた紺色の短パンをサスペンダーで吊っている。対照的な二人だが、十四男もひじりも足元は同じ草履だ。

どちらとも違うのが三人目の女の子だ。

薄い草色のような、戦争映画に出てくる復員服みたいな色の丈の短いワンピース。というか、生地が妙に厚い。まさにそれを切ってつくったんじゃないかとさえ思う。足元には底が木でできたミュールを履いていて、コンクリートにころころと音を立てた。

とても地味だったが、あまり違和感を感じない。この子の心の声はすごい。見たこともない、複雑で多層的な訳のわからない何か。この構造はうっかり覗くと帰ってこられないな。

この子と他人の視界越しに目が合ったわけだが、そのことをみーはうっかり失念していた。

「私のことは9とでも呼ぶといい」「けっこう大人っぽい子だ。名簿みたいなものを渡されている。「君の名は……立原恵美、か。いい名だね」

優しく笑いかけられてぼうっとしてしまう。それもそのはずだ。

9ときたらびっくりするくらいの美少女だった。目は大きくて、まつげが長い。鼻もつんと高い。つやつやの髪は少し淡いキヤラメル色で、ふわふわ波打ちながら肩を覆っている。

「あっ、ありがとう」9とまた目が合ってしまったって、照れくさくて目をそらす。変な子だと思われなかったかな？「そ、その……9ちゃん、かわいいね」

ああいや、今は変な意味じゃなくって。9は何も言わずにこっちを見ている。

「あの……『東京超ロマンガールズ』っていうまんが知ってる？」

「はて、知らないな。済まない」

「そうなの……持ってきたらよかった。あのね、9ちゃんその主人公の女の子と似てるの。すっごくかわいい！」

「それはどうもありがとう」

笑って、9は一步踏み出した。こつつとサンダルの音がして、みーの首筋に手が触れた。冷たい手だった。

「みー。君もかわいいよ……とても。小鹿のような脚をしているね」吐息に産毛が揺れるほどの距離で囁かれて、心臓が跳ねあがった。か、かわいいって言われた！薄紅色の唇はとても柔らかそうで、繊細な髪からはふわりといい香りがする。何だろう、今、すごく幸せな気分だ。

「さて諸君、我々は探偵団だ。船でこのレディの取り調べを始めようではないか」

「よっしゃ！俺はやるぜ！」

あっ、やっぱりそっちが本命なのね。至福の時は甘い余韻を残して去り、三人はみーを連れて凶行の現場となった船へ乗り込むのだった。

みー4 海の上(前書き)

いやー乱世乱世。秘密はばらすものです。

みー4 海の上

せつかく来た犯行現場は鑑識作業中とかで入れてもらえなかった。当たり前である。

甲板で潮風を浴びながら、探偵団、おもに9にここまでのいきさつを含めた事情を聞かれる。だって、あとの二人が二人なのだ。

十四男、トシは第一印象の通りおバカだし、ひじりは喋らない。しかもたまにそつちを見るとギラツと睨まれる。疑われているなあと思ったがそうでもないようだ。大体、心を読もうとしてもなぜか見通せない。

テレパス云々の話を抜いて話したつもりだったのだが、9はふいにこう言った。

「ひじりの心は読めないよ。あの子は父と兄が君と同じでね、思考を暗号化するのが癖になっているんだ」

キラキラの瞳が面白そうに笑っているのを見て、みーはやっとおじさんの視界越しに9と目が合ったことを思い出したのである。

「えっ……9ちゃんも、こうなの？」

「違うな。似たようなものはあるが……こらこら、あまり睨むんじゃない」

叱られたひじりは9のこともギラツと睨んでぶいっとそつぽを向いた。それからふらっとどこかへ行ってしまふ。9が大きなため息をついた。

「……みー、彼のことを嫌わなくてくれ。ひじりには人見知りの気があるんだ」

「そ、そうなんだ？」

心が読めないからそれだけではないような気もするが、9が言うんだからそうだろう。

どうやらみーと同じテレパスの人は表に出ていないだけでまあま

あいるらしい。多分彼らはみーに関する報道を「馬鹿なやつ」「恥さらしが」「ヤツはわれらの中でも最弱よ」と思っけて見ていることだろう。

船をつなぐ綱に集まる魚と戯れていたトシが顔を上げた。

「なーなー9、どうなんだよ？犯人そいつなの？」

やはり疑われていた。みーはじわつと変な汗を滲ませたが、9の心を見るにそうでもないようだ。とても穏やかで警戒はみじんも感じられない。実は自分を疑っているトシも心は穏やかなままだが、どういふことなのだろう？

「違うよ。そして彼女も今日からこの島の住人だ。トシ、君も仲良くしなさい」

「うん。よろしくなー、みー」

変な島だと思ったが、どうやらテレパスでもちゃんと受け入れてくれるようだ。よろしく、と返す。

「さて、何から話したのか……。みー、わからないことがあれば聞いてくれ。何分私たちは島生まれの島育ちでね、何から説明したものかわからないんだよ」

わからないことしかないが、今気になっていることから聞いてみることにする。

「警察の人がなんか違う感じなのは何で？」

いきなり二人の目が点になった。心の中に秘めていて口には出していないが何言ってるんだコイツといわんばかりの顔である。

「けいさつ……。？警察屋なら今日はいねーよ」

「えっ」

じゃあさっきの銃を持つてる人たちって何。助けを求めるように9を見るが、彼女の反応も似たようなものだ。

「何か違うと言われてもちよつとわからないが、あそこにいるのは自警団だ。……こういふのは君の仕事だろう？」

「ああ。世間知らずは仕方ないね」

9の背後に、いつの間にかひじりが帰ってきていた。

みー5 なんがおかしい(前書き)

みーの話ですが、若干別の視点が入ります。ご容赦ください。

みー5 なんがおかしい

立原恵美はテレパスだ。その事実は、だから9が気にしていたのだという納得と彼女に対する少しの罪悪感を彼に残した。

「なあなあひじり！けいさつって何だよ！」

「自警団みたいなもんだよ。何でお前が聞くんだ。大体お前はこないだ乱歩読んで学習したろ。あとだ、あと」

理解してもまだなんとなく心の底にわだかまるものがあるが、何とか隅へ押しやる。せいぜいみを睨むくらいで済みそうだ。住人同士仲良くするのが神の教え。逆らうなどありえない尊い思し召しなのだ。

神と民との橋渡し役である、『カンナギ』ならばなおのこと実行しなくてはならない。

「いいか、まずこの島にはお前の言う『警察』はいない。裁判所もないし弁護士もないし法律だってない。今ここに来てるのは自警団だ」

ひじりは簡潔にわかりやすく言った。しかし、そうかなるほど！そもそも警察なんかなかったんだね！よくわかった！なんて言えるわけがない。

「な、なぬ」

「自警団は島の有志を募って、島民の募金で成り立っている「みー」に口を挟ませずひじりは続けた。

「多少設備が古いが本土の警察に似たものだ。本当は島の治安を守るのが仕事で、今回みたいに外から来たやつがやらかしたのはイレギュラー。でも最近イレギュラーが多い。わかる？」

「わかりません」

「あとこっちに来てない警察屋っていうやつらがいるけど、こっち

は個人で雇える護衛専門の兵隊みたいなやつ。詰め所に駆け込んで
も保護してもらえない。僕らが関わるのは遠足の時と臨海合宿の時
とやくざに目エつけられたときくらいだけだけど覚えるよ」

わからないって言ったのに無視された。おそらく、ひじりはこう
やって外からのお客様がくることに似たような説明をしているのだ
ろう。

つまり、これは会話ではない。案内放送みたいなものだ。とりあ
えず全部聞かないといけない。

「法律がないから刑罰は特に決まってる。軽い罪なら島中に顔と
名前とやったことばら撒くだけだ。人殺しや強盗は情報公開にプラ
ス何やるか、自警団が考える。」

「関係者及びそれ以外の島民からの意見を参考にしつつ射殺かリン
チか財産没収か毎回話し合って決めるけど大体いつも全部やる。犯
人がわからないときはちゃんと捜査するけど、今回みたいに外のや
つが外のやつに島で殺されたときはちょっとやる気が出ない」

「や、やる気？」

「そうやる気。本土の警察の仕事だからな。でも国はここにはそう
いうのは入れないことにしてる。しかもお楽しみのお死刑タイムがな
くて捜査資料と犯人を本土に送還するしかできないからつまらんら
しい。」

「つまらんが自警団がやるしかない。でも自警団はほんとはやりた
くない。設備だって古いしな。ってわけで、手の空いてる子供を使
って推理担当の探偵団を開設した」

案内放送のテープが終わった。

「それが、少年探偵団？」

「違う違う！そんな子供っぽさあふれる名前じゃねーよ！」びよよ
ーんとトシの顔面が飛び出てきた。「俺と9とひじりで、カルト探
偵団だ！」

ひじりが自分の眉間をつまんだ。

カルト探偵団。カルト。カルトって言ったらなんかうまく言えな

いけどよろしくないイメージのような気がする。9だって地下鉄に毒ガスを撒くようなヤバいイメージを描いているし、おそらくひじりもそう思うのだろう。響きだけでつけられたと思しき微妙な組織名である。

「でも……何で警察も法律もないの？」

トシの顔がこわばった。がしっとみーの肩を掴む。伝わるのはただ事じゃない焦燥だ。

「いいのか！？お前いいのかよ！？長いぞ！めっちゃくちゃ話長いぞ！ひじりはオタクだからそういう話させたらずつつつとしゃべってるぞ！？」

「ああ。その話はかなり長い」

9まで渋い顔だ。どうしよう。ひじりは笑顔だが目が笑っていない。

「どうするの？聞かなくていいなら、僕は言わないけど」

みーはちよつと悩んで、決めた。

「一応聞いとく」

ぎえーとトシの悲鳴が響いた。

みー6 頭に入らない説明

むかし、むかし。関白様が日本全国の地図を作って持ってくるよう、大名様たちに指示しました。陸はともかく、海は艦の続くまでというので海沿いの大名はずいぶん困ったそうです。

その時たまたまかなり南のほうに人の住む島が発見されました。海流の関係で日本からのみ、必死で狙うか奇跡の偶然が山ほど重なるかしないとたどり着かないような島です。

住人は日本から流れ着いた漁師たちともともと住み着いていたものたちとの混合で、本土とほとんど同じ文化を持っていました。それがこの島です。

島には王様も武士もその他諸々偉い人がいませんでしたが平和でした。大名はこの島の地図も作って、二重ヶ島と名前も付けて関白様に持っていきました。

本当なら本土との行き来が始まり島のこと知れ渡るところですが、そうはなりませんでした。

どうもこの時居合わせた人に「その島は隔離したままにして、国も何も無い状態の人間がどうなるのか観察したほうがいい」と言われたらしいです。社会実験ですね。

その後関ヶ原の戦いに勝利したのちの將軍が天下を取ります。彼もこの島を知りますが、誰かに進言されたのかどうなのか、島は放っておくことにしました。

独特の文化が育まれたりしそうですが、漁師が流れ着いて居残ったり噂を聞いた農民が逃げ込んだりすることが多かったためほぼほぼ日本のままです。

さらにそのあと、幕府がなくなって明治新政府ができます。今度は西欧の政治思想を試してみたかったらしく、お触れを出して島はほとんど放置することにしました。列強に取られないように意図的

に日本人を送り込んだようです。

戦争が起きた時もやはり放置でした。というか、忘れられていたのかもしれない。

島がもう一度注目されるのは敗戦後です。今度はGHQが発見しました。うっかりアメリカになるところでしたが、そこそこ先進的な文明があるにもかかわらず政府のようなものを持たない島というのが面白かったのかやっぱり放っておくことになりました。

政府がなかった理由ですがたぶんいらなかったのではないでしょうか。この島は常夏でいつでも26度以上あり、海産物も豊富でヤシの木もあるので年中食うに困りません。

台風もたまにしか来ないし、災害もなかったんですね。日本から伝わらなければ服飾などの技術もなかったのではと思われれます。

とはいってもあるものはあります。最近の気候変動で海流が変わったらしくてそこまで必死に狙わなくてもつくようになります。人工衛星の技術が向上して島が上から見えました。

で、少なくともアメリカと日本は知っています、つまりほかの国は知らないというわけで、世界から納得のいく説明と新たな市場の開放を求められました。

領有権をどこぞの国に主張されたりしたけども、この島は今日日本に含まれています。人権団体とかが騒いだけでも、相変わらず社会実験は継続され、法律の適用されない一部地域になっています。

タックスヘブンならぬロウヘブンということであちこちのマフィアがこの島の住人『やくざ』として住み着いています。こうなってくるとさすがに治安が悪くなってくるので自警団と警察屋が設置されました。

やばかった時代もあったようですが今は美しい共生関係が作り上げられ、この通り南の島なので観光地としても人気を集めています。

本当に長かった。寝ずに聞いたみーは偉いとわれながら思う。でも頭の中に残った情報は「ほったらかされていた」「最近出てきた」

「無法地帯」の三つだけだ。

トシの心は動きを止め、9も何か関係のないことを考えていた。オタク。オタクかあ。今後警戒しよう。

「だらしないなあ」ひじりがふんつと鼻で笑う。「僕はさわりのところしか話していいのに」

「さわりだけで十分デス……」

本当にとんでもないところに来てしまった。テレビ見ながらご飯食べたりのんびり通学路を歩いていたりしたあの頃が懐かしい。だってあれでしょ、通学路のんびり歩いてたら銃撃されたりするんですよ。テレビで見た。

ヨーロッパか中国のどこかの国だ。

「テレビなんかないよ。この島の報道機関は新聞とラジオしかない。それも磁場の関係で島外からはノイズばかりだ。

「娯楽が少ないから事件が起こると野次馬がいつぱい来る。規制線を越えちゃって威嚇射撃からの銃撃戦なんて笑えない結果もあるぜ。それを追い返すのも探偵団、というより9の仕事だ。9が言えば散る」

「9ちゃん偉い人なの？」

振り向いた先の9はどこか子供らしくない笑みを浮かべていた。

彼女が何かを言う前に、ひじりが口を開く。

「いいや。この島に偉い『人』はいない。9は人じゃない」

「え？それって……」

聞き返そうとしたその時、自警団の人が来た。鑑識作業が終わったからもう入っついていいらしい。三人はすぐ隣で話を聞いているが、みーは全然聞いていなかった。でも頭の中はおじさんでいっぱいである。

おじさんの死体はもうどこかに持ち出された後で、シートに血の跡と白い線とあと何か気配のようなものが残っている。

ここで死んだ。この隣に座っていた。みーが寝ている間におじさんは死んだ。別に思い入れはないし、何かができたとも思えないが、

何もできなかつたとも思えない。

特にみーは超能力があるのだから。

念動力でモノを動かすことはできない。だけどせめて起きていれば、その瞬間おじさんの心に急を知らせ起こすことができたかもしれない。起きていればおじさんは抵抗できたかもしれない。そうしたら死なずに済んだのかも知れない。

あのおじさんには子供はいなかつたみたいだけど、お父さんやお母さんはいたはずだ。その人たちは悲しまずに済んだのかも知れない。そう思うと今更悲しかった。目を閉じて、白い線の人型に、おじさんがいた辺りにそつと手を合わせる。

ひー3 やつと謎解き(前書き)

やつと捜査が始まりましたね。

ひー3 やつと謎解き

「なるほど……」

話を聞き終えた9は眉間にしわを寄せた。今回の事件は難しいのだろうか。

まず、犯行は夜中の二時に行われたらしい。そして二時どころか夜の間に、被害者を含め客は誰一人として席を立たなかった。こちらは当たり前だ。客はたぶんみんな寝る。

さらに果物ナイフは意外に浅く刺さっていた。これが首の動脈を切ったことによる失血死だが、ギリギリ失血死というところだ。もう羽毛一枚分力がかかっていなければ、舟の揺れで傷口が広がらなかったら誰も死ななかつただろう。

「わからないの？ 怪しい奴は誰？ 僕が鎌をかけてこようか」

「いや、そういう問題ではない。トリックは至極単純だ。……ただ」
言い淀んで、9は整然と並ぶ座席の列に目をやった。シートは三列に並んでいて、被害者の席は最後尾だ。

「これは誰にでもできる。彼より前の席に座って、いや、立っていてもおそろく、できるんだ」

「それほど全員じゃねえか」

わかりきったことを言うトシを小突く。だからわからないんだよわかれよ。

「自警団が持ち物を調べても直接の証拠にはなりえんだろう。証拠は見つかるだろうが……いくらでも言い訳はできる。それに動機の調べようがない。本土は遠すぎる」

本土ならDNAやら何やらの方法があるだろう。しかしこの島でできる科学捜査はせいぜい血液型と指紋と足跡くらいだ。トリックを再現して実証するなんて面倒なことを自警団がやるとも思えない。人間関係から裏を取るにしても本土に行かねばならない。一往復

で簡単に24時間を消費する船で。そして、生きている乗員乗客は37名だ。みーはいいとして、あとの36人。

そんな人数をいつまでも魚市場に押し込んでおくわけにもいかない。遅かれ早かれ捜査を打ち切つて、みんなを解放するしかない犯人ごと。それこそが犯人の計算だ。

つまり。

「残念ながら手詰まりだ、諸君。このまま行くと真犯人がこの島に解き放たれてしまうが、少なくともきやつ思い通りにはならんだろう。しびれを切らした自警団に全員射殺されるだろうからな。一つ安心だ」

引き上げよう、と9が言おうとしたその時、空気を読まないヤツの一言が割つて入った。

「いや、わかるぜ！犯人」

トシは満面の笑みでそう言った。目を見開く9を通り過ぎて襟首をねじりあげる。にこにこしているその顔が神経を逆なでする。

「何言つてんのお前？わかんないって今9が言つたら？お前にわかるかよ」

「うん、俺にはわからないけどわかる！わかるやつならいるだろ！そこに」

そこ？

振り向くと、中腰の姿勢で何やら手を合わせるみーの姿があった。なるほど、テレパスなら全員を集めて心を読めばあとは自白に持つていけるだろう。トリックは割れているのだから、ざっくりそれを披露すればいい。それどころかすでに犯人を知っている可能性がある。

しかし、とひじりは考える。

「でもあいつは探偵団じゃないだろ。部外者使つていいのかよ？」

「なら探偵団にすればいいじゃんか」目から鱗が落ちる思いだった。手から力が抜けて、トシの服にしわだけを残す。

「探偵団作るとは神様に誓つたけど、俺たち三人だけとは誓つて

ないぜ。それに誓いを破つても神様はお許しになるんだろ」

何にも問題ないぜ。何も言い返せなかった。

「なあ、9」

「そうだね。今私たちの使える捜査方法ではここままでが限界だし、今回あつたのなら次からも彼女の力は必要になるだろう」

しかし、しかしとひじりは思うのだ。

「そんなことできるの？」

「ああ」

9は静かに応じてみーの顔をのぞき込む。また嫉妬の獣が身じろぎした。

「彼女は洗礼を受けていないが、今できないということはない。神聖な場所が社のみであるものか。この島のどこであろうとも私がいればそこは聖域だろう？」

「でも」

自分で言っておいてわからなくなった。でも、でも何だろう？ 妥当かどうかは9自身が言うのだから間違いないじゃないか。

「頼んだよ、今代の『カンナギ』」

みー7 儀式

目を開けたら20センチくらいのところに9の顔があった。近い。9ちゃん近い！

「動かないで」

落ち着いた声が心地よく耳をなぶる。冷たい指がそつと左手に絡みついた。相手の頭があるせいで見えないが、きつと恋人つなぎみたいになっっていることだろう。

9の右手はみーを支えるように腰へ添えられている。みーの右手はどうしていたかわからない。でもぎゅっと抱きしめられていたから、胸元に驚いた形のまますくめていたのだろう。

ひじりが何かお経のようなものを唱え始めた。トシが唱和する。形容しがたい不思議な節回しのそれは、二人の少年が声を重ねることで不気味なうなりを伴って鼓膜を揺さぶる。ただ事でない雰囲気、に生唾を飲む。

（なに？）

胸を9の肩へ押し付けるようにして抱きしめられているために、呪文を唱える二人は完全に死角だ。いや、振り向こうと思えば振り向けるだろう。しかし振り向けない。今振り向いてはいけない気がする。

見てはいけない。

「くく……どうした？震えているのか……」体がびくつと痙攣した。腰に添えられた9の手が優しく背中を撫でる。「大丈夫だ。天井の染みを数えている間に終わる」

「て、天井？」染みなんかあったっけ？慌てて上に目が泳いだ。恋人つなぎモドキの間に何か冷たいものが割って入る。「やつ、……」驚いて手を引いたが、9の指はびくともしない。冷たい何かを挟んだ二人の手は空間内のまったく同じ座標に縫い止められたように

動かない。

とつさに読み取ったトシの心は「ありがたい」とか「うらやましい」とか言っていた。ぎよっとする。う、うらやましい？トシは9が好きなんだろうか？いや、たぶんそういうことではないだろう。

ではどうということなのかというところは天下無双のテレパスにもわからない。というか、それらしいイメージは山ほど見えるのだが、何もかも自分の感覚とあまりにかけ離れているために理解できない。何となく陰鬱な感じのする唱和はなおも続いた。

息苦しくなってきたのは9に抱きしめられているせいではないだろう。こんなに暑いのに寒気がする。目の前の人のぬくもりを心地よくすら感じる。手と手の間の冷たい金属は相変わらずよそよそしい。

金属だ。

ふいに手の中のそれは皮を破って肉の中へ潜り込んだ。痛みはない。ただ異物感がある。本来手の肉の中にあるはずのない刃物の感触がずぶずぶと沈み込んでくるのだ。

耳慣れない呪文は絶えず耳から入るために逃げ場をなくして脳の中をさまよう。足元が揺れるのは船の中だからではない。

「そう、私に身を任せなさい」

今私は9ちゃんのほうにもたれかかったんだ。あやすような囁き声にぼんやりと理解するが、何もかもがふわふわとして現実感がない。立ち上がるうにも体にも力が入らない。視界はすりガラスでも通したかのようにぼやけて白っぽい。

刃物が抜けて、生ぬるい何かが流れ出て、いくらかが手と手の間に溜まる。ぬるぬるする。さっきまでみーの体内にあったのに相変わらず冷たいそれは、今度はみーから距離を取った。それがどういうことか何となくわかった。

9は囁きよりもっと小さい、聞こえるか聞こえないかくらいのを「んっ」と漏らした。いけないことを聞いたような気がした。9ちゃんは手が冷たいのに、血はあったかいんだな。

刃物がどこかへ消えて、代わりに手が現れる。温かい手だ。二人の合わせた左手を外側からぐりつと押さえる。何かが床にこぼれればたばたと音を立てた。

強く押さえつけられた手の中で傷口がめくれ上がり、ずれて痛みを訴える。しかし終わらない。高く低く唱和は続き、とうとうみみは意識を失った。

ひー4 仲間入り（前書き）

突然の麻薬です。

ひー4 仲間入り

「9、終わった？」

自分とほとんど身長が変わらない少女の体を器用に近くの座席に座らせ、9は満足げに掌の血をべろりと舐めた。現場はもとより若干スプラッタになってしまったが、もう鑑識は終わったし大した問題ではないだろう。

「ああ。拭いてやって」

血がべつとりとついたみーの左手を秋波ともとれる横目で見ながら言った。船内のワゴンからくすねてきたタオルで少し手荒にこする。やっぱり、と思った。

さつき儀式用のナイフで深く切った傷は内側からピンク色の肉を盛り上げている。奇跡によりふさがりつつあるのだ。

一方の9は手早く脇を縛って止血を済ませただけである。おなじくくすねてきたオキシドールを傷口に垂らして、繰り返し使ったために黄ばんでいる包帯で保護する。上目遣いに見上げた9の顔は青白く、少し心配になった。

もちろん島民の洗礼のために毎回こんなことをしているわけではない。いつもは社の祭壇でもっと簡便な方法を使っし、ひじりだつてこつするのはやっと二回目だ。前は対象者を眠らせてから行ったからもう少し楽だった気もする。

トシが血色のいいみーの顔を見た。つられてひじりも視線をやる。「どっちでも結局落ちんのか」

「仕方がないさ」床に点々と飛び散る赤い斑点を視線がなぞる。「量によっては象でも眠る血だ」

眠るというより、トリップしている感じだけど……ひじりは何も言わなかった。代わりに自分の手についた血を舐める。おいしい。体がふわりと浮き上がるような感覚に身震いする。

「あーひじりズルいぞ！一人で一服してんな！」

「チツ、もつたいない」

トシに見とがめられてしまったので血の付いたままの手を快く差し出す。分け与えることも教えだ。ただ、肌を這う濡れた舌にはまだ慣れない。直接舐めるなよ。

9の血を含む体液にはいわゆる麻薬とほとんど同じ効果がある。快楽作用に依存性。これで身体への悪影響があったらホンモノのだが、飲んだら肌が荒れるとか血管が傷つくとかそういうことはない。

トリップ中を除けば判断力や思考力が低下するってこともない。ひよつとしたらあるかもしれないけど今のところ知られていない。高値どころか無料配布だ。わざわざ9から絞らなくとも成分を含んだ泉がそこかしこに沸いている。島にいる限りは禁断症状に襲われることはまずない。

それでも本土生まれのひじりはさすがに子供相手に使うのはどうかと思うのだが、この島では一般に受け入れられている。祭りの際などこの血をぼたりと落としたりした酒などがふるまわれる。

一応本土と行き来が始まってからは子供に振る舞うのはサイダーになったが、問題の血は入ったままだし酒だつてセルフサービスで常にだれか番をしているわけでもないから無意味というか何というか。

なお、以前やくざがそれらしい紙片や錠剤に入れて本土で売りまくったことがあるが、残念ながらばら撒きすぎて麻薬自体の規制がかなりきつくなってしまった。

今は大麻やLSDに混ぜ込んでアメリカに持ち込んでいるという混ぜることでぶっ飛び方は同じまま消費者の皆様の体にかかる負担をかなり軽くしているというので、彼らは自分たちがあまねく世界に貢献する事業を行っていると確信している。トシの家もその一つだ。

さて本題に戻ろう。

このタイプの洗礼では、通常よりも神との結びつきが強くなる。宗教的な儀式としての格、という意味でもそうだが、何より自分の手に薄く印が残る。みーの掌はさらに再生を進めている。掻いたりしなければ最後には薄い白い線だけが残るだろう。

ともあれこれでみーも仲間入りだ。

「おいトシ……全部舐めたのかよ」

「えへへへ」

自分の手に視線を戻したら聖なる血は完全に舐めつくされていた。トシはへらへらと笑っている。結構な量を摂ったんだからそれもそのはずだ。

「酔ってないだろうな」

「だいじょぶねーす、ウエヒヒヒ」

大丈夫でもなんでもなさそうだが、処置ナシである。放っておくことにして、ねちよねちよになってしまった手を洗っておく。

最近は葬式も新生児もなかったから探偵団の仕事ではなく聖職者としての仕事をするのは割と久々に思える。9だってそうだろう。

いや、違うか？彼女……いや彼は、ひじりが来るよりずっと前からこの島にいた。

さわりに含まれない、みーには話さなかった歴史である。二重ヶ島は海底の隆起とサンゴ礁でできた島で、上から見ると島の周りぐるりと円周状の陸地が囲っているように見える。

このようにできたことで島が二重だから二重ヶ島というのがガイドブックに載っている説明だが、実は現代の科学では説明がついていない。調査した結果、海底の隆起など起こっていないとされたのだ。

島ではこの島の陸地はクチガミ様そのもの、どこか深い海底に身を横たえたその背がこの島なのだと伝えられる。そしておそらくこの言い伝えこそが真実なのだろう。

もちろんひじりは司祭だが迷信深い質ではない。本当に巨人みたいなのがいて、その上に島ができたとは思っていない。

クチガミ様は何か巨大な海洋生物で、たまたまこの辺りで死んだのだらう。関節の結びつきがよっぽど強固であったか何かして死体はバラバラにならず、死骸に土砂が堆積し、やがて陸になった。

人が住み始めたころ、まだ生物の死体らしさが 化石化した歯や爪の部分が残っていて、人々はそういう神話を作ったのだらう。どこかの教授が言っていた説を全力で支持したかった。

しかし、クチガミは現に彼の前に現れた。彼はひじりのこれまでの世界を完膚なきまでに破壊し、代わりに聖職者としての人生を与えた。

そうしてもらえなかったなら、救われなかったならきつと……。嫌な想像を振り払って、9のもとへ戻る。トシにお膳立てをここさせなければ。

みー8 想像力の向こう側

「ん？」

目を開けると、船の座席の後ろ側が目飛び込んできた。どうやら、みーは二重ヶ島に向かう船の中で眠ってしまったようである。

もうずいぶん明るいし、島には着いた頃だろう。隣のおじさんはトイレにでも行ったかな、と思ったところで気づいた。

ここは一番後ろの席じゃない。だって私は今朝島に着いたじゃないか。もうお昼も過ぎたはずだ。大体、こんな船の中にみーを含めて二人しかいないのはおかしい。船着き場には人がいっぱいいるけど、それだっておかしい。

動かそうと体に力を入れると左手が鋭く痛んだ。同時に異様な記憶が次々に蘇ってくる。カルト探偵団。9ちゃん。血。血が流れている。そう、手を深く切られたんだ。その時はあまり痛くなかったけど……。

おそろおそろ、左手を見る。手当などはされていないし、血も出ていない。見た感じでは傷すらない。切られたはずのあたりに違和感があるだけだ。でも力を籠めると痛む。

最中ずつと気が遠かったけど、どうして傷が治っているのかちつともわからないけど、あの儀式は夢ではない。間違いなく現実だ。

席を立つと、今まで座っていた場所のすぐ後ろに犯行現場がそのまま残っていた。記憶にあるより血が多い。自分でも他人のでも見ている気分のいいものではない。わけもなく泳いだ視線は、さつき寝ていた席のすぐ前で眠るもう一人にぶつかる。そうだ、この子の名前は。

「9ちゃん」

他は知らない。そういえば彼女だけ名前を名乗らなかつた。でも9がつくのは間違いない。そつと寝顔をのぞき込む。目を閉じてい

てもやはり少女漫画にでも出てきそうな美少女だ。ふつくらした唇に、長いまつげ。二重瞼。でもその顔色は驚くほど青白い。

具合でも悪いのかなと身を乗り出すと、左手に巻かれた包帯が赤黒い染みを作っていた。そうだ、確か9も手を切られたはずだ。

(私と違って痛がってた。それで、私と違って……)

「治ってない……」

「ああ、治らないよ、社に戻らないと」

突然聞こえた声に驚いて見上げると、さらに前の席にひじりが腰かけ、けだるげにこちらを覗いていた。驚いて思わず後ずさる。

なぜいるのがわからなかったんだろう。そういえば、彼だけ心が読めなかった。9の説明はちよつと難しかったけど、つまりひじりにはみーのテレパシーが効かないのだ。それはつまり、こうしてそばにいることにも気づけないということなのか？

(だとしたらみんな怖い世界を生きてたんだなあ)

視界の外にいる人間にも気づけないなんて、毎日が命がけじゃないか。みーは心が読めないことくらいしか想像しなかった自分をちよつとだけ反省した。ひじりは相変わらずこつちを見つめている。

(しかも心が読めないから何から喋ったらいいかわかんないよう) どう話しかけられたいかはもちろん人によつて違うが、それ以上に気分的問題だ。今日まで周囲の人間すべての心が読める状態で生きてきたみーにとつて、ひじりと話すのは難しい。

普通の人が服だけ宙に浮いた透明人間と話をするようなものだ。

喋つてみたら気のいい奴かもしれないけど喋るまでの道のりが遠い。

重苦しい沈黙が続く。ふいにひじりが口を開いた。

「母さんは僕に、お前は何を考えてるかわからない子だねって言つてたんだ。父さんも、兄さんもそう。……ひよつとしてそういうことかな？」

「うん、何考えてるかわかんない」

探られているのか？ 悩んだ末正直に答えると、ひじりはにこりと笑った。少年らしい笑みだった。得体のしれない不気味なヤツだと

思っていたから何だかほっとする。

みー 少年司祭

「左手は掻くなよ」

ひじりはまた急に口を開いた。彼一人の心が読めないからそう思うのであって、これが普通の間なのかもしれないがまだ慣れない。

「それ、まだちゃんとながってないから。掻いたりむしたりしたら血も出るし肉もはげるよ」

ぞわつとして左手を掻こうとしていた右手を引っ込める。こいつ心が読めるのか？いや、単に手を掻きそうな素振りが見えただけだろう。考えすぎだ、みー。

「う、うん、気をツケマス……」

「ほんとだよ。前にやったのは僕の兄さんだけど蚯蚓腫れのお化けみたいになつてたから」

念を押された。ひよつとして心配されているのだろうか。女の子みたいな顔と冷淡な口調からは何とも判断が付けづらい。

何から話したのか……。不意に考えていることが馬鹿らしくなった。普通に、普通でいいんだ。

「さっきのは何だったの？」

「あれ？洗礼」どこからともなく何かを取り出した。「大丈夫、練習はしたよ。あまり痛くなかつたよ」

何かというか、大きめの刃物だ。包丁なんかよりずっと大きい。

プラスチックの柄が幾何学文様の布を細く裂いたものでぐるぐると巻かれている。意外に分厚く、刃の付いていない片側はギザギザになっているようだ。おそらくこれが祭祀の道具ということなのだろうが、そうは見えない。どう見ても、どう見てもこれは。

「ナイフ？」

「うん」

どう見ても武器だった。それきり黙り込むみーをどうとったのか、

ひじりはかちやりと音を立ててナイフを片手で持ち替えた。逆手に持ったそれを勢いよく振り下ろす。座席の布が破けて中身が飛び出た。

「ちゃんと切れるよ」

そっかそっかなるほどなるほどー、さっきはそれで掌を切られたのかー。わかったわかったー。それにしても外国の映画くらいでしか見たことないごっついナイフだねー。かっこいいー。

(とか思えるわけないじゃん！)

本土だと持っているだけで捕まりそうなブツだ。宗教とは何の関わりもなさそうっていうか関わってたら怖いっていうか。

何で小学生の手にそれが握られてるんだ。しかも何の罪もない座席を刺した。ブスツて。ブスツて。これはあれだ、イジヨウシヤつてやつだ。

ひじりはこれで解決したとも思ったのか、右手に持っていたこれまたごっつい鞘に刃を収めて、またどこへともなくそれをしまった。

本土生まれ？もうだいぶ違う何かに染まってないか？いや待て、今どこへしまったんだ？短パンに半袖のどこにしまえる要素があった？

「さっきのナイフは？」

「これ？」

またどこからともなく怪しいアレが取り出される。違うんです見せなくていいの。

「どこにしまってるの？」

この問いにひじりはにこりともせずにごう言った。

「さあ」

「ぎえー」。

思いのほかみーに優しくできたと思う。最初の印象があれだったせいで腹の底が真つ黒なままだが、やがてこの黒も消えてくれるだろう。今日は社に帰ったら夕飯の前に懺悔しよう。

ちらりと9を見る。

信者の、トシの前では気丈に振る舞っていたが、やはり血が足りないらしい。寝てしまっている。眠ることで修復能力を高め、せめて自力で歩いて帰れるよう貧血だけでも治そうとしている。

本来ならカンナギが社まで運ぶので必要ないが今はそうしなくてはいけないのだ。身体年齢が同じだからひじりと9の体格はほぼ同じで、体重も変わらない。

さらにここからだ和小さい島とはいえそこそこ距離がある。担いで歩くにはひどく遠い。ぐったりしていたら自転車の後ろに乗せたりもできないし、トシに手伝わせるにしても荷が勝ちすぎる。

掌の傷は社に戻って培養槽につけないと治らないが、貧血くらいなら少し寝れば治る、治してしまえということなのだろう。ありがたいやら申し訳ないやら複雑な気分だ。

そういえば用があるんだ。のんびり世間話などしている場合ではない。

「そろそろさ、犯人教えてよ。知ってるんでしょ」

みーはぎよっとしたように見えた。びっくりされても困る。だって探偵団だもの、犯人を捜さなくてはならないではないか。

「な、何で私に」

考えればわかるだろうに聞いてきた。鈍いやつだな。

「だってみーは人の心が読めるんだろ？それに洗礼も済んで今はこの島の民なんだからさ。神へは感謝と信仰を、」

ふと島の老人を相手にしているときのような自分に気づく。そう

いえば本土にはあまりなじみがないかもしれない。

「……まあいいや。今回は、そう、そこで伸びちまってる9の代わりをやってくれないかな？僕はただの小学生司祭だし、トシはあの通り。まともに探偵してるの9だけなんだよね」

名前を出すと、みーは心配そうにその顔を覗き込んだ。そこを代われと言いかけて口をつくむ。

「でも……」

「犯人がわからなかったらさ、捕まえて本土に送り返さなかったら、また誰か殺すかもしれないよ。だってここはそういう島だもん」

もう一度、でも、と言って黙り込んだ。大丈夫だ。きつと本人の中ではもう決まってる。ひじりからは何も言う必要はない。あとは言葉が出てくるのを待つだけだ。そしてその瞬間は意外に早く訪れる。

「教えたい、けど」表情を変えないまま聞いた。「私、その人の顔しか知らないから。名前だって、乗員一覧が一瞬しか見えなくて覚えてないし。推理だつてできないよ。……それでもいい？」

「上出来だ」

ひじりより先に9が応えた。いつ目を覚ましたのかわからないが、これで事件は解決したも同然である。そのままふらつく様子も見せず立ち上がり、ひじりの頭をなでる。

「よく頑張った。では、もう一仕事終わらせようか」

やっぱり背伸びをしていたが、そんなことはどうでもよかった。9が褒めてくれるなら何だっていい。逆に褒めてくれないならそれは自分の人生が終わる時だから。

「……いい加減、私を信用してくれないかな」

少し引つ掛かる囁きだった。僕は9を信じていない？いや、信じている。この島の誰よりも……でも9が言うならそれはきつと真実だ。しかし……薬が残っているのか、頭に靄がかかったようどうまく物が考えられない。

「済んだぜー」

「でかしたトシ！」スカートを翻し、無駄にあざとい身のこなしで歩み寄る。トシの頬を突いて笑う。「ちゃんと船着き場に集めたね、いい子だ」

「ああ、それでかあ」

みーは何かに納得したらしかった。この暑いのに野外の船着き場を選んだのは大した理由じゃない。遮蔽物がないってだけだ。現場となった船の中は座席が並んでいるし、市場には太いコンクリートの柱がある。あまり見晴らしがよくないところは困る。

「トリックは私が話す。トシは他に指示を出すまで乗客を見ている。誰かボ口を出すはずだ。ひじりは適宜合いの手を入れてくれ」

おうよ！と力こぶを作るトシに意味もなく肘鉄を入れる。トシは意味もなくひじりの頬をつねって報いた。

「わかった。概ねいつも通りだね」

「今の私が選べる最良の道がこれなだけさ。みーは好きに動いてくれ」

「うん」

非常に雑な指示を出されたにもかかわらずみーは自信ありげに頷いた。そういえば心を読めるのか。9の心が覗けるなんて羨ましい限りである。

そして36人の容疑者たちの前に、子供たちが姿を現した。

みー10 謎解き(前書き)

やっとだ。

無法地帯とはいえここは先進国日本である。人々の服装は乱れても汚れてもいない。老若男女ともに健康そうだ。

しかしそんな彼らを囲むのは黒光りする銃口である。船着き場はまさに独裁国家・銃殺刑の執行五秒前という雰囲気だった。

「指紋がないのは、持ってないからよ。ふふ。ナイフはね、飛ばしたのー」

さっきまでとだいぶ異なる声と口調で9が話し出す。この子は『女の子らしく』振る舞うことに必死になっている。そりゃあそうだ、あんなかつこいい子供が現れたら大人は困惑する。

「お嬢ちゃん、冗談はよしなよ」おばさんが口を開いた。この人は犯人ではない。犯人はまだボ口を出していない。「飛ばすったってどうやって？座席の上で体ひねって投げたって上手くは当たらないでしょ」

「だから、飛ばしたんだってばー」
かわいらしくぷくつと膨れてみせる。

トシは大体どんな顔かわかるのでひじりの横顔をうかがう。見事に引きつっていた。そうだよ、さすがに寒気がするかな。しかし子供の素直な感想と裏腹に三十代半ばいまだ独身彼氏ナシのおばさんは微笑ましく思っ息をついた。

「じゃあどうやって飛ばしたのかな？」

「バネよ！ナイフにバネをつけて、ばーんって！席も立たなくていいし、イツセキニチヨーよね」

ひとつ後で教えてあげよう。9ちゃん、さすがに小学校三年生でも一石二鳥はわかるよって。

「おいおい馬鹿なこと言うなよガキ」ちょっと悪そうなお兄さんが口を開いた。金髪で頬に傷がある。犯人はまだ何も言わない。「バ

ネだつて？針金びよよんのあれか？」

彼は見た目が悪そうなだけだ。大学生になり、髪を染めてちよつと悪ぶっているがとても真面目である。国立大で理科の勉強をしている大学生で、今回この島には教授と一緒に珍しい生き物の観察をしに来た。

頬の傷はサルの一種を観察した際にケージの一部が壊れてできたものだ。すぐに病院に行ったのだが、お医者さんが抜糸の時にしくじった。

とても人を殺すような人間ではない。

「そうよっ」

「無理だろ」今度はちよつと悪いお兄さんが口を開いた。さっきのお兄さんの同級生だ。「ナイフが飛ぶようなでっかいバネなんか持ちこみや、すぐ怪しまれる。それに俺たちそんなもの持ってなかつたろ？」

ろ？と自警団の人に確認しようとするが彼は無言で銃を向けられ、じわつと変な汗を流して固まった。ドラマの知識だけど、本土の警察なら「そうですね。そんなものはありませんでした」って言うもんね。

このお兄さんの何が悪いって授業をあまり真面目に受けていないことだ。頑張つて勉強して大学に入ったところで燃え尽きたらしい。テスト前に友達のノートを見せてもらつたりして留年は回避している。でも多分、殺人はしないだろう。

「お兄さん、変なのー。おつきいバネなんて、いらないわよ。だつて、」

「いい加減にしてくれ」今度は50くらいのおじいさんだ。ずいぶんイライラしているが犯人は黙つたままだ。「いつまでこんな茶番につき合わされねばならんのだ……この島の人間は非常識で困る」

おじいさんがイライラしているのは、研究機材を一時的にとはいえ没収されたせいだ。というより、見知らぬ人に勝手にそれらをいじられたのが嫌だった。あと、早く島のシカを追い回したい。でも

人一人死んでるんだから仕方ないよ。

「あれねー、事件を起こしたのは本土の人なのに、おっかしーい」
釘を刺して9は続ける。9ちゃんたら、子供がまずやらない『皮肉』
ってテクニク使っちゃったよ。「バネならみんな持つてるでしょ
？」

みー11 謎解き2 (前書き)

身もふたもないサブタイトルです。だってそれしかしてないもん。

みー１１ 謎解き２

「なっ……」

イライラしている教授以外の人たちがざわついた。

教授は人間に興味がなかった。

ひじりがどこからともなく段ボール製の筆箱を差し出す。本当にどこにしまつてあるんだろう。シャツにポケットはないから、……ズボン？あまり深く考えないほうが精神衛生によさそうだ。

９は観衆に背を向けてそれを受け取り、中身をひとつ取り出した。そのまま分解し、向き直る。

「ボールペンよ。ほーら、バネが入ってるわ。確かに一つだけだとナイフは飛ばないけど、たくさん集めたらどうかしら？」

「こつちに、十本分ほど束ねたものを用意してあるよ」ひじりが同じ筆箱からバネの塊を取り出した。トシが自警団の人に言つて作つてもらつたものだ。「細い糸で両端をかがつてあるんだ。ほら、伸び縮みする」

ぎゅっと押しつぶされたバネは元気よく指を押し戻した。これならナイフだつて飛ばせそうだ。しかし。

「そんなのが当たるのかい？」

「もちろんよ。おじさん、持つてきて！」

自警団のおじさんが船の座席を一对持つてきた。この船の座席は二つずつでくつついている。子供にいいように使われてるなあ、自警団。さぞかし哀愁が漂うものと思いきや、喜んでいいる。ってか崇拜している。うわー変態だ！

「あれは昔、同じ型の船で使われていた座席よ。あの船から持つてくるのは難しそうだったからスクラップ置き場から持つてきてもらったわ……トシ、これを持って向こうの白い線のところ立ってちよーだいっ」

「わ、わかった！」

どこからともなく現れたミカン箱を受け取り、トシは指示された位置に立った。うわ。9ちゃんたら怖いこと考えるなあ。読み取ったみーは首をすくめた。でも9ちゃんだもんな。仕方ないなあ。

「ナイフは実際に使われたものがここにあるわ。でも、もうひとつは実際に犯人がどれを使ったかわからないから、とりあえず定規とセロテープを使うわ」

二本の、太めのプラスチック定規だ。小学生が使っていそうなもの、というより使っているのだろう。おそらくひじりあたりが。トシはあんな綺麗に文房具を使うタイプじゃない。

まずその長辺を合わせるようにして、角度をつけ、怪我のある左手でぴたりと固定する。うん、この辺も女の子らしからぬ部分だな。9ちゃん握力おかしい。ていうか痛くないの？

「これを」

右手だけでセロテープを取った。器用である。みーもたまに横着してああやって片手でテープを取るけど、いつもねじれちゃってうまく使えない。しかし9のテープはねじれてもくっついていてもいらないよさげな長さだ。

「こうして」

内側と外側にペタペタと貼っていく。樋。容疑者たちの目には樋に見えた。犯人はわずかに動揺を見せただけだ。外から見ると分にはそれが犯人だとわかるはずもない。そう、心でも読めない限りは。「こうすると、ナイフをまっすぐ飛ばすためのガイド代わりになるわ。ここにあるのは定規だから少し念入りにくっつけたけど、もっと楽なものを使った可能性が高いわね。というか、固定しなくてもつながってるもの、とか」

9は容疑者たちを振り返った。ぞつとするような視線だった。でも不思議とみーは怖くないのだった。

犯人はやはり、動揺した。二つ折り式のスマホのケースが正解である。しかし表に出さず、知らぬ存ぜぬを通す気である。賢い。

この島には本土ほど発達した科学捜査はない。心が読めるような人間がいなければ、隠し通せる。

みー12 実験(前書き)

ちょっと短めです。描写はヘルシーにしていきましょう。

「そしたら、座席の間の隙間に入れるの……うん、ぴったりね」

ぴたりと接した座席の途中に槌が通った。なんとなく、ここから何をするのか誰にも予想がついた。そして嫌な予感がした。ただ一人トシを除いては。彼は立ち位置が少し遠すぎた。潮騒で話がよく聞こえないのだ。馬鹿だからじゃない。

「あとはこの隙間から覗きながら、角度を調整するの……うーん、こんなものかしら？」

あはは、よくわからなーい。いいのか。一人よくわからないのに命かけてないか。

目の前の状況がぶつ飛びすぎてツッコミの入られない大人たちを尻目に、9は定規のガイドにナイフをセットした。もちろん9の中ではちゃんと計算されている。トシを危険にさらしたりはしない。バネはゼロテープで手に固定している。片手でその反発を抑え込んでいる。やっぱりあの子握力おかし……おかしくない？

「後はナイフから手を放すだけよ、えい！」
ドシュッ。

やめてやれというみんなの切実な心の叫びに反して重苦しい音が響いた。ミカン箱を抱えたトシがあおむけに倒れる。船着き場は死体発見時と同じかそれ以上のお葬式ムードに包まれた。

「……とこのように、大体の方角と威力を設定してナイフを飛ばすことができるわけだ」9ちゃん、素に戻ってるよ。目くばせすると彼女は無理やり路線変更した。「なんちゃってっ。しかも、このバネは解いちゃえばただの壊れたボールペンなの。えへっ。すごいでしょう？」

だが幸いなことにギャラリィはそれどころではなかったようだ。
え、ちょ、あの子死んでない。すごい音したけど大丈夫か？誰か

助けに行けよ。シカ……。あんな威力にしてい、もつと弱いやつ……うん、犯人はそれとわかるほど狼狽している。揺さぶりは効果があったようだ。でも犯人以外の人も同じくらい狼狽するよねーこれは。結局、外からは誰かわからないじゃん。

うむ、ここはテレパシー少女が一皮脱ぐか。

「冤罪だったんだよね」並みいる『その他』の中ひとり、犯人がぴくりと反応する。それはそうだろう、この言葉はさっきまさにこの人の深層意識から汲み上げたから。「そう、冤罪だったんだ」

二度目は少し大きな声で言い聞かせるように言った。この言葉をキーワードに、その人物の中に次々にイメージが浮かんでくる。そのイメージを適切な言葉にして、声に乗せる。

「あの日、いつも通り電車に乗ってたんだ。痴漢なんかしなかったのに、『この人痴漢です！』って。捕まっただ……そのまま、有罪になっちゃった」

容疑者のうち男性陣に視線が集まる。そうだよ、痴漢冤罪で大変なことになるのは主に男性だね。

みー13 犯人(前書き)

心が読めるとトリックなんか意味をなさないですね。

みー13 犯人

「本当は前にいた女の人がぐいぐいって、おっぱいを押し付けて来たんだよね。裁判しても裁判してもダメ……とうとう心を病んで、彼は自殺しちゃったの」

彼ですと。容疑者の内にまた動揺が広がる。みーはじっと犯人の顔を見つめた。

「あなたは彼の名誉棄損で相手を訴えようとした。でも、あの弁護士さんがこう言ったんだね　首吊ったってことはどうせやってたんだろ、って。あのナイフはその時のもの。その時あなたが持ったもの」

何だい？あんたも自殺するのかい？

「許せなかつたんだよね？　添乗員さん」

視線の先にいたのは40代半ばのベテラン添乗員のおばさんだった。彼女は何も言わない。

みーは驚くほど、相手に同情を持たなかった。恋人を亡くして、そのあと弁護士さんにつらく当たられて、怒ったのはわかる。殺意だつて湧くだろう。そりゃあ仕方ないことだ。

でも、気に入らない。二重ヶ島には科学捜査がないから、捕まらないからって、時を待った。10年以上も。本番に向けて何度かこつそり練習した。その打算が気に入らない。それでいて、いざ実行する段になって怖気づいて、バネの威力を弱めた。

ふざけるな。

やるなら確固たる意志でやり抜け。そしておとなしくお縄につけ。大体、その行為のせいでみんな休暇や研究が台無しだ。復讐するなら一人でやつてろ。

それに、裁きを下すべきなのはどちらかといえば最初に恋人を陥れた女の人なんじゃないのか。弁護士さんは確かに対応がよくない

けどお仕事してただけだろう。女の人にはノータッチらしいのが一番わからない。

ひょっとして、おばさんこそ彼氏のことを疑っていたんじゃないのか。

「違うの？」9を見習うことにした。皮肉だ。「確かに、許せなかった割に詰めも甘いし潔くもないなあ。違う人かも」

「そ、そうよ。私なわけじゃない……だってナイフの鞘はどこにも……」

あららー？おつかしい。非常にわざとらしい9の声が響いた。な、なにがとおばさんは慌てる。そう、慌てる。だって犯人だからだ。これで私の出番は終わりだ。

みーはちよつと誇らしい気持ちになって胸を張った。あとは9ちゃんといじりが綻びを広げてその奥の真実を引きずり出してくれる。

「ねえねえひじり、私、あのナイフに鞘があるなんて言ったー？」
言いながらゆらりとひじりに擦り寄る。ひじりは静かに手を回して抱き留めた。微笑みを交わし、未分化で未発達な幼い肢体が絡み合う。そして二人は愛でも囁くように口を開いた。

「言っていないね」

「言っていないわね」

釘をさすように、交互に。

「ていうか鞘あったんだね」

「あつたみたいね」

二人の妖精がくすくすと笑いあう。花が触れ合うような美しい情景だった。見とれると同時に、なんとなく視線をそらしてしまうような。他の人たちは驚いたけれど少し納得もしたようだ。

教授はシカの繁殖に思いをはせている。もはや前なんか見ていない。幸せな人である。

「知らなかったね」

「知らなかったわ」

反対に咎人は色を失い、どろどろと汗をかく。己の失言に気づい

ただ。もちろん、これがダメでも他の切り口はあったんだからねたぶん。

「僕はタオルにでも包んでたんだと思ってたよ」

「それに鞄なんか海にでも捨てたでしょうにね。……だからわかるのか」

ひじりの腕を解かないまま、9が添乗員の向山みゆきさんを粘りのある視線でとらえた。ワンピースの肩紐が滑り落ちていた。いつの間にかその両手はひじりの背中へ回っている。

「鞄は探しても見つからない」と

船着き場に再びの沈黙が訪れた。教授を除く誰もがみな視線をみゆきさんに集中し、凍り付いたように動かない。視線の意味はいろいろあるけど、どの視線も彼女に重圧を与えることに変わりはない。

「おーい！9つてばー、何すんだよ驚いたぞー！すっげー！」

静寂を破ったのはまさかの彼だった。ナイフが深々と刺さったミカン箱を抱えて目をキラキラさせながら歩いてきた。

死んでない？そりゃあそうだ。あのミカン箱には土とか草とか誰かのカバンに入っていた一張羅とかが詰めてあつてナイフが貫通しないようになってる。ちゃんと安全対策はしてあるのだ。

誰もがトシに目を奪われ、この瞬間、すべての注意がみゆきさんから外れた。これは彼女にある種の勇気を与えた。

「お！？うわっ」

突き飛ばされたトシがもう一度仰向けに地面に転がる。タイミングが悪かった。あつと思う間もなくみゆきさんはミカン箱からナイフを引き抜いてトシの首に押し当てていた。

「動くなッ！」

ドスの効いた怒鳴り声が怖くて、みーは首をすくめた。いや、ドスが効いているから怖いんじゃない。もちろんそれも怖いけど、それ以上に別のものが怖い。あの声は何かがない。他の声にあるような中身みたいなものがない。

浮気がばれて言い訳してる時のお父さんと同じだ。

「それで……どうするんだ」少しも慌てず、首を傾げ、9は問いかける。

「人質をとったからには目的があるのだろう？どうするんだ。選択肢は限られる。そのナイフではここにいる全員を殺しつくせはしない。ということとは、ここから逃げるのか？逃げて、どこへ行く。こだけが罪を問われない唯一の地だというのに」

そうか。今わかった。先がないんだ、あの声には。

「……う、うるさい」

どこへ行くのか、実のところみゆきさん自身にもわからない。トシを人質に逃げるつもりなのか、逃げてどこへ行くのか。

この島以外の場所は本土はもちろんのこと、どこへ行っても彼女を罪人にするだろう。人を殺したら罪になるから。そして、ここ以外には罪の概念があるから。

「た、助けてっ……」

さすがに涙目だがトシは落ち着いている。そこまで状況を悲観していないし恐れてもいない。信じている。神を。9を。そして友人であるひじりを。とても静かだ。心の中を覗いているみーまで落ち着いた気分になる。

でも怖いと思った。子供の心からあんなものが読めることが、そしてつられて自分も落ち着きを取り戻していることが怖い。

「なぜ答えない？ 答えよ、向山みゆき。お前は何を求め何を望み、どこへ向かう。望むのならば叶えるぞ」

少年の背中に回した指先が静かに背骨を撫でる。ひじりはそれが心地よいとでもいうように身じろぎした。9の唇が吊り上がる。

「いや、答えられないのか」

みゆきさんはとうとううるさいツと甲高い声で叫んでナイフを振り上げた。当然それがトシの首に突き立てられるものと思ってみんなはそれぞれに恐怖した。目を閉じる人も目を見開く人も、耳をふさぐ人も身動きできない人もいた。教授を除いて。

だがいつまでたってもそれは起きなかった。

みー15 一応の解決(前書き)

解決しちゃいます。

まず変な音がした。

大きな重い音だ。中年の首に突き刺さっていて、今また少年の首に刺さろうとしていた銀色の刃はキラリキラリと傾き始めた日の光を反射しながら地面に落ちて行った。

まろぶようにして前に出たトシが駆け足で9のもとへ帰ってくる。地面に刃が当たって不快な金属音がした。

「自警団の銃だと、トシにも穴が開くからね」

わずかにズレた9の体の影から確かに見える。みゆきさんの視界にはちゃんと見える。9の身体の向こうから狙いを定めていたのだろう。

「あと、僕はただ抱かれているだけの男じゃないよ」

ひじりの右手には拳銃が握られていた。鈍い光沢。リボルバー式の改造拳銃である。いや、密造かもしれない。映画やドラマで見るとようなものとはずいぶん違って変な形だ。

手が小さく持ちづらいからか、グリップの部分は中心がくりぬかれていて、そこに手を通して引き金に指を添えているのが印象的だった。

みゆきさんは地面にへたり込み、落ちたナイフと撃たれた手、その間の血の跡をかわるがわる見つめて、最後にひじりを見た。見開いた目は虚ろだ。

意外なことに痛みは感じていない。きっとびっくりしすぎて思考回路が止まっているんだろう。

「この……この島では、罪は許されるんじゃないの」

抱き合っていた二人が離れた。ひじりの頬が少し赤い。やっぱり照れるのかなと関係ないことを考えた。

「そうだね、あなたの罪はすべて許されている」

「じゃあ、どうして」

答える前にまた引き金が引かれた。今度はみゆきさんの、ストッキングの脚を撃ち抜く。銃声が怖いので耳をふさいだ。ひじりはにこりともせず、慣れた手つきでリボルバーの弾倉を回す。

「ただ僕が気に入らないんだ。友達を突き飛ばしたから。人質にしたから。正直死ねばいいと思ってる」

「でも、それは」

それは　すでに許された罪ではないの？

「うん。あなたに罪はないね。おお、神はすでに汝を許したもった。次は無事な方の肘だった。言っていることとやっていることが合っていない。誰より島の掟に通じる小学生司祭は次の標的に狙いを定める。」

「今あなたに向けているのは、僕の、僕による、僕のための、一方的な暴力だ。そうだ、これは間違いなく罪だ。教典にもあるよ」

さつき撃たなかった踵が爆ぜた。最後にひじりは今までより高いところへ銃を構えた。

「だけど神様は僕の罪もまたお許しになるんだ。だからいいんだ」
銃声とともにみゆきさんの帽子が舞い落ちた。絶叫が響く。帽子のすぐ上を弾が通過していったから我に返ったのだ。

「あ、あああつ。痛い！痛い！」

泣き叫ぶ彼女を背に、ひじりは自警団のおじさんに笑いかけた。
さわやかな笑顔だった。

「ああ、スツキリした。連れて行ってください。本土へ」

犯人は見つかり、四肢の関節を撃ち抜かれて本土に帰って行く。
トシは人質に取られたけど怪我もなく無事。大学チームはシカを目指してかつ飛んだ。めでたし、めでたし。

(全然めでたくないけど……)

とはいえあれ以上の犠牲者が出るよりはましなのかなとみーは思う。被害者はあの時点でお亡くなりになっていた。どうしようもない。あと犯人は自業自得だ。何とでもなるがいい。

「みー、君はどこへ行くんだ？言ってくれば我々で案内するよ」

「あ、ありがとう9ちゃん。でもいいよ」

もう迎えは来ている。また集まりだした野次馬の中からぴよこつとおばあさんが顔を出した。

「恵美ちゃん」

「はい！」返事をしてから、もう一度9のほうへ向く。ちよつと間の抜けた顔だった。「もう、立原のおばあちゃんが迎えに来てくれたから。バイバイ！」

「うん、また会おう」

立原とは、あの立原だったか。思い至らないとは私もまだ甘い。どうして9がそう思ったのか、みーはすぐに理由を知ることになる。

途中でトシと別れて帰路についた。9の住処は島全体というかこの辺の海域だが、化身の小さいほうの9にとつての住居は社だ。

社に住んでいるというより、9が住んでいるところが社になったというだけの話だが、どっちでもあまり差はないという。

社があるのは芯の島……二重ヶ島の内側の島だ。その中心の小高い山に開いた大きな鍾乳洞の入り口から半分身を乗り出すようにして社が建っている。いろいろな国からやくざが来ているだけはあつて国籍不明な建物だ。

シャチホコが乗った円錐形の塔らしきもののほか、どういふわけかステンドグラスのバラ窓があるし、あちこちにサイケな色遣いで不思議な幾何学模様のデザインが施され、入り口の扉の内側には蓮の花を描いたのれんが掛けてある。建材自体は鉄筋コンクリートだ。とどめに、一応社なのでなんかとりあえず丹塗りの鳥居が建ててある。外へはみ出ている部分はキリスト教の影響を受けたらしい懺悔室と講堂だけ。ことあるごとに改築される。

実は中は意外に住環境が整っている。普通神社にないトイレもある。最近IHがついた。

ここへカンナギのひじりは間借りするような形で住んでいる。他に、テンゾと呼ばれる女性たちが数人、少し離れたところの建物に住み込んでいる。彼女らは社の維持管理および食事の用意など雑用を行う。

並んだ椅子の間を通り抜け、懺悔室の裏の扉から居住空間へ入る。通り過ぎる。裏口を開けるとひんやりとした空気が肌を刺す。中樞はこの奥だ。

懐中電灯を片手に、滑る足元を気を付けてさらに進む。ぼんやりと光る湖が広がっている。この湖をカンナギたちは『口』と呼んで

きた。言いて妙だ。まさに口なのである。

「解いてくれ」

9が左手を差し出した。滲んだ血が乾いて包帯が固まっている。傷口に貼りついていたが、ベリベリと剥がした。再び開き、新たな血を流し始めたその手を『口』へと浸す。そう、この別名が培養槽だ。

クチガミの本体は海の底にある。今は眠っている。あまりに大きいその体の一部が海面に顔を出したところへ土砂が堆積したのがこの芯の島だ。そして、ここはその本体とつながっている。深みに身を横たえる彼と外界をつなぐ窓である。

例えば今9が死んだら、新しい9はここから生まれる。カンナギの一生が終わるのもこの場所だ。

その時を待つてる。ずっと。

「よし、塞がった」みちみちと音を立てて傷口に付着したウジのようなものが蠢く。美しい。培養槽で十分な量の細胞をくつつけて、余分な細胞は取り除くのだ。

「戻ろうか。何か話したいことがあるのだろうか」

「うん……」

向かうのは懺悔室ではない。ひじりの部屋だ。彼はまだ修行中の身で、自室が第二の懺悔室と化している。部屋に入ると、9は布団の上に身を投げた。これはテンゾが敷いている。しばらくその柔らかさを堪能した後、9は身を起こし両手をこちらへ延べた。

「ひじり、おいで」

膝をついてすがりついた。ここは社だから、9の姿を本来に近い形で知覚できる。厚い胸と広い肩幅は少女のそれではない。両肩を優しく包む太い腕と大きな手も。本来クチガミは男神だ。

服装のほうはあまりもとの服を逸脱した格好にはできないらしく、大体いつ見ても裸ワイシャツか復員服だ。今回は後者のほうだった。和服は好きではないらしい。

「9……っ」

「ほら、泣かない泣かない。大丈夫、私が何でも許してあげるから」
彼はもともと遠い天の果てにいたが、罪を得てここへ来た。本人によればそこまで大物でもないらしく何者かに仕えていた。そこで何をしたかというのはいくわからないが、やりすぎたらしい。そしてこの海の底でじつとしていて、つまり謹慎である。

「僕は……みーに嫉妬してた」

「うん」

そんな彼が『どんな罪でも許す神』として信仰されているのは、別に大した理由ではない。命じられたわけでも望んだわけでもない。「分け合わないと、いけないのに」

「そうだね。これから直していこうか」

単に人類が非常に小さな存在で、ゆえにその小さきものどもが何をやらかそうとクチガミからは何でもないので。もちろん彼だって一人ひとりの見分けはつく。賢いから観察すればそのコミュニティーで何がタブーなのかもわかる。理由もおそらく理解している。

ただし、どんなに行き過ぎたことでも彼にとっては些末事である。たとえば、彼の依代である9に想像を絶する拷問を加えたのち死体をバラバラにしてそこから中に捨てたとしよう。

これは人間で言うたとまたま紙で指を切っちゃったくらいのものである。いや、そこまで重くもないかもしれない。そんなだから許しの神となっている。

「それと……あの女の人の手足を撃った」

「きつと痛かったろう。それどころか後遺症が残るかもしれないな」

「うん。でもあまり後悔してない。悪かったとは思うけど」

「それも許す。君の罪はもうない」9は手を離れた。まだ行かないで。その胸元をぐつと掴む。「……どうした？夕飯が冷めてしまっよ」

驚いたような海色の瞳がこちらを見つめる。ゆらゆらとその中で自分の影が揺れている。そのままあちらの世界へ行けたらどんなにいいだろう。汚いものなど一つもない、冷たい海の底。光の届かな

い無彩色の泥の樂園。

「僕は……僕はあなたを信じていないのかな」9が何か言おうとしたが、ひじりに耳を傾ける余裕はなかった。「信じていない、としたら、何のために、どうして、生きて」

息を吸っているはずなのに苦しい。頭がガンガン痛くなってきた。じわつと嫌な汗が全身に噴き出す。

ああ、怖い。わけがわからないけれど怖い。ひたすら怖い。9への信仰だけが自分の生きる意味なのに、その意味が大きく揺らいでいる。そのことは別に構わない。

だって僕なんかが生きていて何になるだろう？

死にたいのだ。むしろそれが望みだ。この穢れた肉体を捨てて、汚物に塗れた心を脱ぎ捨てて、腐敗し醜悪に歪んだ魂を地獄の炎で焼き尽くしたい。意味がないのならどっかへ身を投げてしまえばいい。

その場所は「口」や海に限らない。この島には一人で出歩く子供を解体して夕飯にする変態がいるし、誰でもいいから相手が死ぬまで殴りたい気分のお兄さんだっているし、割って入った誰かを一瞬で八木の巢にするようなやくざの抗争だってあちこちで起こっている。

いくらでも死に方がある。そうだ首を吊ったっていい。鉛の弾丸を呑むのも悪くない。痛み？痛みは浄化の光だ。

なのになぜだろう、9を信仰していないということがこんなにも暗くのしかかってくる。

「いやだ、こわい……こわいよう」

「誰か」

クチガミは声を上げて泣き出した幼い子を胸元へ抱き寄せた。ほんぽんと背中を優しく撫でる。歯の根も合わない悲痛な嗚咽が耳元で鳴り響く。恐怖。嫌悪。厭世。その根源。今は9に依存することでごまかしているが、すべて、いつかは彼自身が向き合ねばならない問題だ。

そう、私なしで。

そのためにクチガミはあんなことを言ったのだ。

『いい加減、私を信用してくれないかな』

実際、ひじりは9……クチガミのことを全く信用していない。もちろん信仰もしていない。縋っているだけ。もたれかかるだけ。彼がしているのはただの依存だ。

ひじり自身もそれを感じ取っている。何とかしなければならぬとどこかで思っている。だがまだ、彼の心は傷と向き合えるほど育つても立ち直つてもいなかった。土台が崩れているならば、上に立つことはできない。

急ぎすぎたらしい。

「大丈夫だ。君が怖れるものたちはここにはいない。知っているだろう」

とはいえあまりに急がないでいると彼の人生が終わってしまうのだった。依存したまま、自分自身のないまま死んでいってしまう。あまりに不幸ではないか。だが、クチガミは治らないなら治らないで、それはそれでいいのかもしれないと考えてもいた。

自らの傷に向き合うことは必ず苦痛を伴う。その傷が治ることは必ずしも幸福とは言えない。特にひじりは記憶に蓋をしているわけでもないから、じわじわと痛みはそこから溢れてくる。それを忘れようと自分を消してひたすら依存する。

ない不幸と、幸福とは言えない自分自身。彼はどちらのほうが幸せなのか。

「うん、でも」

「そうだよ。ここは私の島だ。嫌なものは入ってこられない……ね」
ひじりは精神への干渉を含め、異能というものをすべて無効化する力を持っているが、遙か高位の存在であるクチガミにとっては何の障壁にもならない。

望むのならばその記憶を壊して消し去って何かもっと違う幸せなものに書き換えてやることもできる。しかし、彼はそれを望まなかった。

望まないなら救えない。

「そうだ、ここには、いない」

強い子だとは思わない。負の感情が自分自身に向きすぎて、過去と現在を切り離せないから記憶を消す意味を理解できない。だから復讐にも昇華にも踏み切れない愚かで哀れな子だ。

「いないよ。君には名前をあげただろう？君は私の司祭じゃないか」

「うん、僕は、ひじり。神薙ひじり」

嗚咽が収まり、震えも落ち着きだす。もう大丈夫かな。依代に無理をさせながらひじりを抱き上げる。こう見えて実は体重が変わっていないから大仕事だ。おかげで今回の『9』は歴代を見ても恐ろしさを禁じ得ない筋肉量になっている。

「夕飯にしようか。おなががすいたろう」

みー16 新たなる事件

ばあちゃんの旅館は海の見える小高い崖の上にあった。いや、旅館だと思つが本当のところはわからない。

というのは、まだ着いていないからだ。所在が分かるのは何でもない。少しばあちゃんの心に侵入して見せていただいただけだ。覗き見たイメージは、どれもこれも見た目は旅館なのに、くつついてきている言葉がいちいちおかしい。

外交、とか。なんだか難しいことを言っている。クチガミ様のため、つてもあった。みーについては『後継者』『はてモノになるか?』。つまりみーは次の女将さんとして呼ばれたことになる。

勝手な話だとは思つが養つてもらう以上やらねばなるまい。将来の夢は一応あつて、できたらケーキ屋さんになりたかつたのだが女将も悪くないように思う。かつこいいし。また旅館でケーキを作らないとも限らないではないか。

これ以上ない崖つぶちにあつて、みーはかつてないほどの前向き姿勢を見せていた。引き返してどうする当てもないしきつとこの先にはスケスケの道があるさ。

もう少しよく見れば『旅館』とだけ書いた看板があつたけど、その二文字しかない。だが立原のばあちゃんなんだから立原旅館とか、二重ヶ島なんだから二重旅館とかいくらでも名付けようはありそんなものである。

みーにはわからなかつたが、これはむしろ自然なことだつた。なにしろこの島には旅館は一つしかないのである。区別する必要がない。旅館とさえ言えばそれで通る。

「ばあちゃん」

ここから見えるはずのない旅館の看板について尋ねるのはやめにして、別のことを聞くべく声をかけた。

「うん？なに？晩御飯ならちょっと待ってもらおうよ」

「みーの目はばあちゃんのお腹にあった。着物のお腹に付けた黒光り。……それは、なにかなあ」

「マカロフだねえ」

銃だよ。知ってたよ。でも聞きたかったんだよ。信じたくなかったんだよ。やばい島に来たって。もう戻れないんだって。いや、戻ってどうする当てもないけどね。

着いてみたら、見た目は普通の旅館だった。宿泊棟は和風四階建て。でもろくなことが行われていない気配がする。四つて数字のせいではないはずだ。

204号室の人はえるえすでいい？をやっている。本土ではできないんだそう。できなくていいよ。

203号室は空き。さつき親子が出ていった。今日の便で帰るらしい。じゃあ死体と犯人と一緒に帰ることになるね。港にある船で本土の基準を満たしてるのあれだけだもんね。

202号室は船着き場にいた三十代独身のおばちゃん。鏡の前で水着を着てポーズをとっている。男あさりをするらしい。

201号室には昼ドラドロドロの不倫密会現場。奥さんに置き去りにされた旦那さんは向かいの212号室だ。彼の中でグレイゾーンが確信に変わっていく。やだー修羅場が予想されるじゃないですかー。

213号室は空き。214号室は204号室と似たり寄ったり。

そのあと……215、216と来て、あつ死んだ。

どうしようもないけど、薬物乱用とリゾバと不倫と殺人が同時並行される旅館に向かわなければならぬ自分の運命を恨む。できたら関わり合いになりたくない。頼むから犯人よ、死体発見させないでくれ。完全犯罪してくれ。

でも、事件になったらまた9ちゃんに会えるのかな。一瞬だけそう考えて、首を振る。ううん9ちゃんだってこの島のどこかに住んでるはず。事件が起きる必要性はない。ないぞ。普通に探すんだ。

みー 17 はじめての夜(前書き)

まったりいきますよ。

みー17 はじめての夜

夕飯は意外と普通だった。みそ汁にご飯におかず。和食だ。おいしい。

「明日から学校だからねえ、ちゃんと早起きするんだよう」
立原のばあちゃんが何を言ったのかわからなかった。

「え、学校？この島って学校あるの？」

「あるよう。小学校と高等小学校、中学校に高等学校、大学だつてあるさ」

この島を何だと思ってるのという心の声に心の中で謝る。すみません未開の地かなんかだと思ってました。高等小学校っていうのは聞いたことがないが塾みたいなものだろうか。

「でも、私、教科書置いてきちゃった」

「いいよいいよ。本土とは教科書も違うからねえ、ばあちゃん用意しといた。時間割もお部屋に貼ってるから忘れずに持ってくんだよう」

食事のあと、お客さんに混じってお風呂に入る。

おい。

こんなんでいいのか、旅館。いやいいんだっけ、この島では。座席をナイフで刺していいし、おねえさんの手足を撃ち抜いていいし、麻薬使つていいし。法律がないだけで一応制限は掛けているらしいが、政教分離もない。

そして一番上の位置にいる神の前では何をしても許される。それじゃあ誰も決まりを守らないし、作ろうともしないよな。

それでも一応、お風呂は男女に分かれているらしい。男湯と女湯がある。ちゃんとそれぞれの性別の人が入っている。その間にボックス席みたいなものがあって、おばさんがこっくりこっくりしながら番をしている。

（実は、男湯に入っても女湯に入ってもいいんだけどね……本土の人ってどうして片方にしか入らないのかな）

ぎえー。それは知りたくなかった。番頭さんから自分の能力を初めて疎むくらしいの精神攻撃を受け、みーは涙目になりながら女湯へ進んだ。

別に男の人が怖いんじゃない。女湯に男の人が紛れ込んで何で困るのかもわからない。ただ、多くの場合トイレとお風呂は男女で分けられているものだ。そういう常識なのだ。そんな常識のないものとして平然としている、そんな心は知りたくなかった。

浴室は広々としていて、様々な浴槽があった。家の近くのスーパー銭湯より広い！みーは怖いのも忘れてはしやぎながら風呂場を動き回った。こんなにくろちよろしてたらお母さんに怒られちゃうな。でももう、お母さんには一生会うこともないだろう。当然怒られたりもしないはずだ。ということは……みーはその先を考えるのはやめた。いない人のこと考えたって仕方ないじゃないか。

おっともう9時だ。急がなくちゃ。

みーはいい子なので早寝早起きするのだ。それにしても9か。9ちゃん……ほんとは何て名前なんだろう。明日学校で会ったら聞かなくちゃ。

名前は結構大事だ。多くの人は自分の名前が自分自身の定義と結びついている。つまり、読むべき心にも影響している。いい悪いは特にならない。ただ、心の声の決まりが少し変わるだけ。読み取るときに決まりに合わせているほうがよくわかるだけ。

もちろんそれ以外にも山ほど決まりにかかわるものがあるけれど、名前は一番短くて手ごろな決まりを知るための道具だ。

9ちゃんのこととはもっとよく知りたい。トシやひじりのことも。ただどひじりは心が読めないし、トシは心の声が今まで見て来たのと全然違う法則で動いていてやっぱりよくわからないのだ。突破口はわりかし本土の子に近いように見える9ちゃんだろう。

「わあ、大きなベッドだ！」

部屋は思ったより広がった。ダイブする。女将さん、結構いいか
もしれない。しばしごろごろと芋虫のように転がる。ふかふかで心
地いい。とろけた表情でゴロゴロを続ける。どこもかしこも、ふわ
ふわ、ふわふわ。

「ん？」

何か硬いものが手に触れた。なんだろう？重ねられたパッドを少
しめくってみる。黒光りする何か……意外、それは拳銃だった。

意外でもないか。知ってた。触れて読み取った物の記憶は、女の
子が来るのが楽しみで家具なんかをいろいろ揃えて、最後に『常識
通りに』ここへ銃を隠したばあちゃん。常識って何だろうね。そっ
とめくったパッドを元に戻す。

うんっ。寝よう。ひもを引っ張って電気を消した。

みー18 学校

「今日は転校生を紹介します。立原さん、どうぞ」

言われて入った教室は意外に普通だった。前の学校より少し広いくらいの教室に机が整然と並べられ、子供たちが座っている。35人くらいだろうか。みな一様に質素で褪せたような色の服だ。

黒板の前で自己紹介する。後ろのほうの席でトシが手を振っていた。隣が空いているから来いということらしい。

後二人は？

「いやあ、俺はクラス分けの運がなくてさあ」二人ずつ座れる横長の机にべちよりと頬を押しつぶして寄りかかる。「あの二人、二組さんなんだよ」

なるほど。心を読み取り答える前から答えはわかっていたが頷く。テレパシーばかりじゃ会話にならないからだ。それはいかながものか。言い方だって大事だろう。

ここは四組。みーがここに充てられたのは単に生徒数が一人減ったところだからだ。減った理由はよくわからないけど、この世にいないことは確かである。おっともう突っ込まないからな。みーはスキルスキルを高めるんだ。

授業は本土のものと大して変わらなかった。先生が教科ごとに代わるくらいだ。担任の先生は理科の先生で、今日は理科はないから授業をやらなかった。

内容も進んでも遅れてもいない。教科書はちよつと茶色い変な紙。わら半紙できていてくれるけれど、中身は本土のものと大体同じよ。うだ。むしろ、書き込みがしやすくて良い。壁も床も古い木でま。るでおとぎ話みたいだ。

みーはすぐにこの学校を気に入った。

問題は、クラスメイトに溶け込めるか、だが……どうもこっちは

難しそうである。

この学校、女の子はみんなおっぱ頭で男の子はみんな丸刈りなのだ。みーのように少し伸ばした髪をビーズの付いたゴムでくくっているなんて子はいない。

長い髪は高等小学校からちらほら出て、中学校になるとおさげになる。誰もシユシユや飾りのついたゴムは持っていない。ツインテールをしたり、ポニーテールにしたりする子もいない。女の子はおっぱか、おさげの二種類だ。

心を読んだところで髪型の話で盛り上がるのは絶望的。おしゃれの話も難しそうだ。みんな流行の一周遅れというか何というか、くすんだ色の見慣れない服を着ている。男の子は短パンで女の子はスカート。

制服があるわけでもないようだ。一応ワンピースの女の子もいるが、やっぱり色見はくすんだ感じ。9ちゃんも地味だったわけでもないんだ、と思った。そうすると異端なのはひじりである。丸刈りじゃない。

実は9も髪は長いしくくつてもいかなかったから異端なのだが、みーはそれに気づかなかった。とても自然に思えたからだ。

はて、ひじりはどうして外れているんだろう？直接聞いても変な目で見られるだけだし、他の子たちのイメージは何だかとりとめがなくてはつきりしない。また会えたら聞けばいいか。

給食は本土とほぼ同じだった。給食当番が配膳する。牛乳は瓶だ。牛乳の当番にはなりたくないなあ。この日のおかずはすいとんとよくわからない魚の塩焼き。

やたら鮮やかなブルーなんだけど何の魚だろう。知りたいところだが、誰の頭にも「魚」「何かの魚」「たべもの」「くらいのことしか浮かんでいないので断念した。とりあえず食べられることは確かである。白身で淡泊な味がした。

放課後、誰かに話しかけようとしたのだがそうはいかなかった。邪魔が入ったのだ。啞然とするみーの手を取って、トシはずんずん

歩いていく。

「ちよ、ちよっとどこに行くの」

「わかつてるだろ！」無駄に目を輝かせる。そうだ、向かっているのは二組の教室だ。「島を回ってくるんだ。9とひじりも一緒だぜ！」

つまり、島を案内してくれようというのである。しかも9ちゃんにも会える！願ったりかなったりだが、何だろう、ちよっと困るような困らないような気もする。昨日の……なんだっけ？

まあいつか。重要な事柄だったような気もしたが、みーはあっさり忘れて9、ひじりと合流した。どうやら本日は島をすべて回るつもりらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n2177eb/>

偽本格冒険推理 ～ 孤島来るやつ大体殺人～

2018年3月12日04時48分発行